琉球大学学術リポジトリ

琉球と日本本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的位置づけをめぐる総合的研究

メタデータ	言語:
	出版者: 高良倉吉
	公開日: 2009-03-03
	キーワード (Ja): トカラ列島, 琉球, 十島村, 中之島, 奄美
	キーワード (En): Tokara Islands, Ryukyuan, Toshima village, Nakanosima island, Amami Islands
	作成者: 高良, 倉吉, 山里, 純一, 池田 栄史, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 真栄平, 房明, 豊見山, 和行, 鈴木, 寛之, Takara, Kurayoshi, Yamazato, Junichi, Ikeda, Yoshifumi, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Maehira, Fusaaki, Tomiyama, Kazuyuki, Suzuki, Hiroyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9008

資　料　編

ワークショップ議事録

トカラ列島研究文献一覧

新聞資料

ワークショップ議事録

会場：琉球大学総合研究棟 703 室
日時：2003 年 12 月 13 日（土）　13:00～18:00

次第（司会：高良倉吉）

○研究の全体展望　高良倉吉
○個別問題提起
　歴史学分野　山里純一　豊見山和行　深澤秋人　渡辺美季　深瀬公一郎
　民俗学分野　赤嶺政信　鈴木寛之
　言語学分野　狩俣繁久　（発表順）
○総合討論（質疑応答含む）

1．研究の全体展望

高良倉吉

トカラをどのように位置付けたらよいのか、そのことについてお話したいと思います。まず一番目に、我々の当初の出発のテーマでありました「琉球圏」の検討対象としてのトカラについてです。琉球圏は奄美を含めてどこまで広がるかという、そういう検討対象としてのトカラ。これは下野敏見[1]先生が出した問題でもあるわけですが、それを含めて基層文化という概念をどのようように考えるか。そして、その基層文化がどのような歴史的なプロセスを経て変化していくのかという問題があると思います。今回トカラをやってわかったことは、トカラというところはけっこう外からの移住者、例えば奄美からの移住者など住民の入れ替えがあり、その辺りの状況も含めて、ではトカラをどのように考えるのか、という微妙な問題が含まれていると感じました。

それから二番目は、琉球・ヤマトを往還する通過点としてのトカラの問題です。七島灘という象徴的な言葉もありますけれども、さまざまな船、人、もの、情報たちがこの海域を通過する。ヤマトと琉球列島の往還ルートというような場所として位置づけられるだろうということです。

三番目に古琉球辞令書の発給範囲に言及したいと思います。とりあえず現時点の研究では、トカラはこの辞令書発給範囲に入ってない。その状況の前提として、トカラをめぐる琉球と特に南部九州との歴史的なかかわりの問題や、例えば琉球で辞令書体制ができていたときの、それが王国体制なわけですけれども、琉球にとっての内部と、それ以外の周縁

---

[1] しもの　としみ（元鹿児島大学教授）

という関係の中でトカラを考えるというのは是か非かという問題となる。

四番目に隠蔽政策としてのトカラがあげられます。なぜ隠蔽政策にトカラや宝島というような用語が使われたのかという問題、それから高良由加利さんがやっていますけれども、七島というものが、近世琉球にとってリアリティをもった存在としてその内容をつめていけるかというようなこともあるだろうと思います。

五番目に、今日その話題が豊富に出ると思いますが、漂着地帯としてのトカラがあげられます。交通の通過点でもありますし、七島灘という言葉にも象徴される海の難所でもあるので、漂着はかなりありました。周辺のアジアのさまざまな諸活動というものがトカラに漂着し、漂着地帯としての状況をつくりだしているということだと思います。

六番目に近世史の問題として琉薩間の海運の問題があって、特に大和船についてですけれども、その運航状況についてはいくつか触れられていますが、真正面からこの大和船の運航状況を議論した研究はまだありません。しかし、わかっている情報では水主等の担い手としてのトカラ衆、七島衆がいる。それについて海運史のなかでどのように考えられるか。特にトカラ人の参画、関与の問題です。

それから七番目、これは現代史のはなしですが、7 年程度の米軍政下にトカラがあるということについてです。沖縄側の戦後史研究もいろいろと始まっていますけれども、全体としてみると琉球史研究のなかで戦後史は相当立ち遅れていて、沖縄の側から奄美、トカラ、そういった地域を視野に入れた軍政下の初期状況の戦後史像というものがまだ描かれていないという問題があります。現代史の問題としてトカラがいま欠落しているということだろうと思います。沖縄の人にとっては特に悪石島あたりでの対馬丸の遭難に象徴されるような、相当な被害を出した海域としてトカラのイメージがあります。

もうひとつは、トカラ側の復帰運動というか、米軍政下から日本に復帰するということについてです。『十島村誌』もいろいろ書いていますけれども、あの叙述では、十分な復帰像というものが描かれていない。奄美や沖縄と比較しながら、議論できるような歴史叙述がどうもないということですね。

八番目に戦後密貿易の拠点としてのトカラがあげられます。1980 年代のはじめに沖縄国際大学の石原昌家さんが、与那国を拠点としたその密貿易の状況について一冊のルポルタージュをすでに発表しています。それが戦後の密貿易状況を描いた最初の大きな仕事だったのですが、2 年ほど前ですかね、密貿易にかかわった与那国出身の人が沖縄タイムスから「密貿易島」という与那国の状況を描いた本を出版しました。それから奄美の名瀬市を拠点にするサネンバナという女性史研究グループのリーダー佐竹京子さんという方が中心になって、「軍政下奄美の密航・密貿易」という大変すぐれた本を最近お出しになっています。私も読んだのですが、それらの本で終戦直後の密貿易、密航状況について一定のラフスケッチが描かれています。実は、北端の密貿易の拠点が口之島だったことがわかってきたわけですが、『十島村誌』はこの状況を、さらりとしか書いてなくて、しかも独自の調査をしておらず、佐竹さんたちのサークルの機関誌に書かれたものを少し料理した記述しか

ない。トカラが戦後密貿易状況にどう関わったかという問題がよくわからないということがあります。11月のはじめに私は口之島にちょっと行って来たんです。口之島の人たちに密貿易状況、島人がどう関与したかという話を少し聞いてきましたけれども、このような現場についての調査研究もやっぱり必要ではないだろうかと思います。口之島というのはご存知だと思いますが、集落は東側にあるんですね。前之浜という海岸に面した高台になったところに集落がありまして、その反対側の西の方、そこの浜を西之浜といっていますが、昔からそこが港に使われていたようです。つまり密貿易の拠点だったんです。現在はフェリーが接岸する港ですけれども、戦後、密貿易が盛んになるまでは、そこには船具とかいったものを置いておく小さな小屋が数戸建っているくらいで、人家も全くないようなところだったらしいのですが、そこが突然密貿易の拠点になる。島の人間たちの役割としては、掘っ立て小屋をつくって密航者や密貿易者たちにリースするとか、荷役作業を手伝うとか、そのような関わりを直に聞いてきました。いずれにしても奄美・与那国の状況が描かれているにもかかわらず、トカラが密貿易に関わった状況がまだ十分に描かれていないということだと思います。

それから九番目はちょっと大きな話ですけれども、このような言い方が正しいかどうかはわかりませんが、奄美を含んだ琉球の歴史像を構築する上でのトカラというのは一体なんなのだろうかという問題です。みなさんお読みになったと思いますが、奄美史をやっている弓削政己[2]さんが『十島村誌』出版の際に、奄美の側からトカラをどう読むか、という問題提起を南海日日新聞に書いています。この文章は、本人の同意が得られれば今回出す報告書の後ろの方に参考論文としてぜひ掲載したいと考えています。佐竹さんや女性史グループがやった密航、密貿易の状況を通して、奄美がトカラにどう関わっていたのかということが見えるような記述もありますので、奄美史にとってのトカラは何だろうかという点もあげられます。奄美からトカラへの移住者の問題もありますし、一時期は大島郡に十島村が所属していたわけですから、関わりが深いんです。しかし、奄美を描くときにトカラがなかなか射程に入っていないという問題も存在しているんだろうと思います。琉球史という歴史のイメージを考えるとき、その問題はどのように受け取られるべき問題だろうかということがあるだろうということです。

十番目は私もよくわからないんですが、アジアという海域史にとってのトカラはどういうふうに位置づけられるだろうかという問題があるような気がします。トカラ史というか、トカラ文化を様々な角度から考えるわけですけども、トカラ史というものを認識する主体の問題です。琉球からの眼差しとか、奄美からの眼差し、近世日本からの眼差しでもいいわけですけれども、主体としてのトカラというものを我々はどのように考えるべきだろうかということです。

特に琉球史のなかの古琉球論でいうと、中世日本の東アジア海域における様々なネット

---

2 ゆげ　まさみ（奄美史研究者）

ワークのなかで、多様な活動があるわけですけれども、そういったダイナミックな状況の中にトカラを位置づけて議論する。そういった状況をつくれるかどうか、というのがひとつ課題なのかなと思っています。

2．個別問題提起

山里純一

古代史の資料のなかでトカラというふうに読めるものはいくつか出てきますけれども、これまでの研究でこのトカラがいわゆる十島村のトカラ列島ではないということはほぼ明らかになっています。できればトカラ列島にもっていきたいという気持ちはあっても、妻が舎衛の人であるとか、海見島に漂着した後、日向に漂着したとあった。そういう記事を見る限りにおいては、いわゆるトカラ列島のトカラではないだろう、多分タイあたりの国からやってきた人ではないか、というのが現在の通説にほぼなっているわけです。そういうことになりますと、古代史のなかに、私が研究対象としているトカラ列島の史料は皆無ということになります。そういうわけで大変厳しい状況にありますけれども、トカラに直接関わらなくても少し関連付けられるかなと思うのは、やはり遣唐使航路の南島路ぐらいでしょう。南島路というのは遣唐使が中国への往還に採った航路の一つでありまして、この南島、すなわち、奄美・沖縄を経由する航路が正式な航路として認定されていたかどうかという問題があります。

これについてはいろいろ議論がありまして、私も以前この問題に関わったことがあります。私自身は南島路の存在を認めるという立場をとっておりますけども、史料が限られておりまして、確実に明確なかたちで南島を経由しているということがわかる史料はプリント一枚目にあるものだけなんですね。第 9 次遣唐使と第 10 次遣唐船のいずれも帰路に関するものです。

天平 4 年に任命された遣唐使は、翌年唐に渡りますけども、その時の史料はなく、帰る時に恐らく 4 船で蘇州を出発したと思われますが、途中悪い風、ヤナカジが吹いて 4 船ばらばらになってしまうわけですね。第一船と第二船に関しては史料がありまして、『続日本紀』の記事によれば第一船に乗った遣唐使たちが多禰島について、そして都に帰ってきています。それから第二船も蘇州を出発して間もなく漂流しますけれども、南海に入って中国に戻った後に、日本に帰るために再度出発しまして、随分遅れますけども無事天平 8 年に帰ってきたという記事があります。この第二船に関しては、『続日本紀』ではどういうルートで帰ってきたかということは出てまいりません。しかし正倉院文書として残っている天平 8 年度の薩摩国正税帳の支出項目に遣唐使第二船に対して食糧を支給したことが出てまいりますので、天平 8 年度には少なくともこの遣唐使船の乗組員が、薩摩国を通過したことがわかります。薩摩国を通過したということは、そのあたり史料はありませんけども、おそらく直接薩摩の国に漂着したのではなくて、第一船同様多禰島、あるいはそれ以南の

どこかの島に着き、南島を経由して薩摩国に上陸したのだろうというふうに考えられます。

その次の天平勝宝4年に派遣されました遣唐使の場合は、これも往路については記事がないのですが、帰国に際しては鑑真を連れて帰ったということもありまして、『唐大和上東征伝』という淡海三船が書いた鑑真の日本渡来に関する本のなかに詳しく記事が出てまいります。この時も4船同時に蘇州を出発しましたが、そのうち第一船と第二船、第三船が、いわゆる「阿児奈波島」に到着します。第四船はどうも後の史料によると、海上で船尾部に火災が発生したようでありまして、それで船団から離れて漂流するという運命をたどるわけです。阿児奈波島に着いた第一船・第二船・第三船は奄美に向けて出発しまして、屋久島に着いた後、第二船と第三船は無事入京しています。ところが第一船は座礁・漂流してベトナム方面について、結局入京を果たせませんでした。しかし出発して間もなく火災で漂流した第四船の方は入京を果たしています。このように、鑑真を乗せた第10次遣唐使は、間違いなく帰路に南島を経由しています。史料的に以上の2例しかない中で、果たして南島を経由する航路というものを正式な公式な航路として認めることができるだろうかということが、議論になっているわけです。

南島路を正式の航路として認めない人は、史料はすべて帰路に偏っているという事、本来なら五島列島を目指して出発した船がですね、たまたま五島列島にたどり着けずに、漂流されて南島の島々のどこかの島にたどり着いたため、結果的に南島を経由したということを指摘します。あくまでも結果に採った航路が南島路で漂着路といいますか、そういう名称でもって呼ぶべきだ、というわけです。南島経由を偶然と見るか、最初から意図したものと見るか、大変難しいわけなんですね。

見方によっては双方の解釈も、いずれも解釈論としては成り立つというふうに思うわけですが、いくつかの理由で、私自身は少なくとも意図的に南島路を経由したのだろうと思っています。その理由の一つに、プリント2枚目の史料にある『続日本紀』の天平勝宝6年の記事に出てくる南島に立てられた牌があげられます。これは遣唐使のために、南島に牌を立てたというものです。これは多分、板に書かれていたもので、その島が何という島であって、どこに港があって、水のありか、それからこの島から見える向うの島は何という島である、どのくらいの距離があるというようなことを書いた牌が南島の島々に立てられていたということであります。天平7年に立てられたものが、次の遣唐使の時には腐れてあまり役立っていなかったので、立て替えたという記事なんですね。こういう牌を単なる漂着のためというより、もっと積極的に南島経由の際の目印としていたというふうに考えるわけなんです。それと、この南島路というのは、大宝元年の遣唐使から採用されているという点です。もちろんそれ以前に白雉4年の653年に、遣唐使がですね、薩摩の曲(くま)の竹島のところに漂着し命からがら助かって入京を果たしたという記事があります。2人の大使がそれぞれ120人の船に分かれて乗船し出発しますが、そのうちの第二船の大使高田根麻呂という大使が乗った船は120人の乗組員とともに遭難してしまうんですね。そのうちの5人だけがかろうじて助かって竹島に漂着して、そこからいかだをつくってまた京に

戻ってきたというわけなんです。この薩摩のところで遭難したという白雉4年の遣唐使というものが、南島を経由することを目的として南に下ってそこで遭難したというふうにみるのか、この頃は北路といいまして、朝鮮半島の西岸を通る航路ですが、行く途中に、風に押し戻されて薩摩のあたりで遭難したとみるのか、という問題はあります。どうもこの史料による限りでは、やはり南のほうに下って行ってそこから行こうとした形跡がなくもないということで、南島経由の先蹤（せんしょう）と一応みなされるわけですけれども、恒常的に南島を通るようになるのはやっぱり大宝元年以後の遣唐使なわけです。その大宝元年というのが大宝律令の制定にどうも合せていることから、律令法典の具備を唐に示す目的であったと思われます。

南島に覓国使（くにまぎし）というのが数年前に派遣されていますが、これも南島路の開拓と関係があるのではないか。白雉4年に南島経由で渡ろうとした形跡はあるが、いきなり安全な北路から東シナ海を一気に渡るというのは心理的にかなりの抵抗があったと考えざるを得ません。やっぱりそのころから南島と大和の国家との間にはなんらかの情報がかなりあって、中国と沖縄の間は、航路もある程度整っているというのをどうも情報としてもっていたのではないかと思うわけです。奄美・沖縄まで行けば、そこから中国へわたるのは安全であるという情報をもとに大宝元年の遣唐使からは南島を経由する航路の採用に踏み切ったのではなかろうかというふうに思うわけです。

そこで、南島路を正式な航路とした場合に、史料には出てきませんけども、どういうコースで、トカラを通過したのかということが問題になります。2枚目のレジュメを見てください。下野先生があげている藩政時代の帆船の航路図ですけれども、これによればトカラ列島の西側を通っており、恐らく遣唐使もこのようにトカラ列島西側を通ったであろうと下野先生は推測しています。

奄美から屋久島まで相当の距離がありますから、古代の史料には全く現れませんが、ハプニングが生じた時にはトカラへの寄港もあったのではないか、そのことの物証が考古学的に得られればいいなというふうに思うわけであります。

トカラに強引に結びつけて、以上で私の報告を終えたいと思います。

以下の方々の個別問題提起の内容については、本書の各報告を参照してください。

豊見山和行「虚構と実像の錯綜する島＝トカラ　－近世琉球におけるトカラの歴史的役割－」

深澤秋人「琉球・薩摩交流史の痕跡－トカラ列島の北西部海域をめぐる調査報告－」

渡辺美季「近世トカラと漂流・漂着－中国・朝鮮との関わりを中心に－」

深瀬公一郎「環シナ海域圏におけるトカラ列島－「七島」から「宝島」へ－」

赤嶺政信「トカラの民俗－沖縄との比較のための覚書－」

鈴木寛之「中之島西区における墓制調査の概要」
狩俣繁久「九州方言と琉球方言のはざまで　－トカラ方言の位置をかんがえる－」

3．討論

深澤：では、すみません。私からでよろしいでしょうか。私のレジュメの5番のおわりにというところですが、若干補足というか、お話させていただければと思います。わたしに機会をたくさん与えていただけて感謝しているんですが、一番多く県外に行っています。2001年8月の合同調査の西郷南州顕彰館で話す機会があったかと思うんですが、そこで大きく分けて二つのことをいいました。それがレジュメの二つなんですが、港の呼称と地理的景観、中近世期のそれぞれの時期での機能につきましては、港湾といいますか、船の停泊地といいますか、それを示す呼称としまして、たとえば浦であるとか、泊であるとか、津であるとか、浜であるとか、港という言葉があって、それと地理的な景観には関係があるのか、というようなコメントをしたかと思います。

しかしながら、それは本当に時代的には幅があるわけですから、その機能には時期的な変化もあると思います。流通全体で言いますと、ある時期においては製造、集積、集散、売却、消費される一連の流れの中で一体どこで機能していた港なのか、ということをやはり考えなければならないと思いました。本日、深瀬さん・渡辺さんからもあったんですが、結局トカラには港がない、と。私も港湾、港らしきものがないというふりだしに戻っています。

奄美大島の宇検に関しましては、それはほんとにもう地理的な条件では港として抜群のところです。中之島はごらんになったとおりで、口永良部島は2本の岬がはり出している、非常にいい港があります。屋久島の一湊という、『名勝図会』にも琉球船が停泊したとある、そこにも行きました。さらには黒島、硫黄島のほかにも薩摩半島では山川・枕崎、枕崎は近代以降発展しますが、泊・久志まで行ってまいりました。さらには錦江湾、鹿児島ですが、前之浜は防波堤の先ということになるんですが、埋め立てられた防波堤がだいたいどのあたりであったのかを歩いてまいりました。さらには甲突川河口部に船手座という、トカラを管轄していた役場が甲突川の河口にありまして、それが2回移動しているんですが、その2箇所とも確かめてまいりました。港というより、ドックといった方がいいかもしれません。さらには川内川河口にも行ってまいりました。先ほど渡辺さんからの報告で、トカラの船の船頭が、泊の人が勤めている、といったのがありましたよね。

渡辺：はい。諏訪之瀬です。

深澤：諏訪之瀬でしたか。それで、その船はどこにとどまるのかと。中之島で高良先生と話した記憶があるんですが、一体出発地はどこなのか、結局振り出しに戻ってしまった。

トカラの船ということなんですが、どこからきたどういう船なのか、どこにあるのか。私は特に屋久島の北を意識して何回も行かせてもらったんですが、写真で御覧いただきましたような港があります。ですから、トカラの船は一体どこにいたのか、周辺の島を考えてみたところ、いい港があるのは口永良部島とか屋久島あたりなのか、と思ったりしました。さらにはトカラ列島といいましても、狩俣先生の方言のご報告でもありましたが、三つに分かれるかもしれないと。それこそ行政区をこえたまとまりが、行政区のなかにもいくつかのグループがあるのではないかと思います。屋久島の北側の島嶼を訪れてみましたら、例えば口永良部島ですと口之島が見えるらしいんです。あとでコピーをお見せしようと思ったんですが、『口永良部島の歴史』という冊子、屋久島高等学校の先生が書いたものらしいんですが、口之島の密貿易が口永良部までつながっていたという記述もあるんです。ですからトカラ列島のなかでまとまりを考える、ということよりも、屋久島の北はもちろん、大隅諸島ともつながっていくというヒントを与えられました。

そしてさらには、竹島の北側から錦江湾の口が見えるんですよ。開聞岳と佐多岬がはっきりみえました。さらにはその、黒島につきましては港から野間岬が見えたほかにですね、これは非常にびっくりしたんですが、甑島の花火が見えると。さらには一番高い所に行くと、年に何回かは下甑島の島影も見えるらしいと。中之島をめぐる伝承も存在しているんだ、ということにも触れました。

トカラ列島のなかでいくつかにもちろんわかれるんですが、それだけではなくて北とつながっているということを踏査して改めて強く感じた次第です。ですから行政区はもちろん、大隅諸島、トカラ列島というくくりだけではなく、それがさらにそのなかで完結しないで面として広がっている。それが海域につながっていくと。深瀬さんが報告した、大隅・日向海域への連続性ということも肌で感じました。2 年前の西郷南州顕彰館でのコメントの宿題は残ったままなんですが、ヒントをいくつか得ることはできました。

豊見山：先ほどの深澤先生の報告に関連して、それと渡辺さんに対してもうかがいます。七島というのはいい港がないということと、ではどうしてそういう海運業がさかんであるのか、という非常に矛盾した状況があるんですけれども、それは実は矛盾してなくて、久高島もそうですよね。いわゆるいい港があって、そこが拠点になるというのではなくて、そこの人間達が島にあまりいなくて、各地を移動し、島に帰ってくるのは時々、とみていいでしょうか。そういう状況から考えると、七島の人間達は常に七島を拠点にして動いているという、七島出身であるということはあっても、薩摩とか、琉球などで移動する、移動しながら商売なり交易をするという、そういう性質の人々と思われる。そういうふうに考えると、必ずしもいい港がなくても、海運業というのは成り立っている

のではないか。久高や渡名喜もそんなにいい港があるわけではなくて、そういう島でありながら、海運業に従事せざるを得ないという側面も一つあるのではないかということを感じました。おそらく、近世のトカラ、七島の人たちというのは、自分のホームグラウンドの港は、必ずしも七島になくてもいいのではないのかと感じました。

では、七島の船はどこでつくっているのかという問題が残ります。七島で作っているとは考えにくい。屋久島などやっぱりネットワークがあって、そこらへんに資金を提供して作らせて、運用していたのではないか。これは久高もそうですよね。久高の船頭たちは自分で船をつくるわけではなくて、沖縄の東海岸あたりと関係している。そういう意味では、港の問題というのは、非常に印象深い問題だと思います。

それから深瀬さんのにちょっとコメントすると、七島衆が王府の役人に任官しているという史料4ですが、新参 1 世重時照喜名親雲上が役人になったということですよね。役人というか士族になったということですよね。その父親が七島口之島の住人で、松本壱岐重次。こういう人物達というのは薩摩の征服前、あるいは征服直後には沖縄島に結構いて、沖縄から出られなくなった状況の中で沖縄の人間に吸収されていく。直接その人が士族になる場合もあるし、その子どもから士族になるということもある。だから任官というよりも、士族身分の獲得ではないかと思います。もちろん士族になれなかった大和人もいっぱいいたのではないのか。その人たちは家譜がないのでくわしいことはわからないが。家譜がある人だけをみると、ほかの堺だとかいろんなところからの人間達が士族の中に入り込んでいる。士族になることと役人になることとは別ではないかと思います。

高良：ありがとうございました。豊見山先生が出したコメント、深瀬さんが出した問題とからんできて、トカラというのをトカラの島々につなぎとめて発想するのではなくて、トカラというのは拠点だったかもしれないけれども、彼らが漂っている形を海民とか海上勢力とか、もうちょっとフットワークのいいトカラ衆、七島衆というのを考えて、どこかで船をつくり、どこかで船を借りているかもしれない、どこか条件のいい港を使ってそこを拠点にして様々なネットワークを使ってビジネスをしたりするという、まさに深瀬さんの海域イメージから捉えると説明ができる。

トカラの島に僕らがはじめていった時、こんなところでは船もつくれそうにないし、造船場の立地条件も悪そうだし、大木なんかもなさそうだし、いい港湾もない。例の口之島の密貿易状況ですけれども、島の人に聞いたら港湾が整備されはじめるのは 1960 年代以降なんですよ。50 年代後半辺りから小さなバースができたりするんですけれども密貿易時代はどうしたかと聞いたら、やっぱり大きな船は沖待ちするんですね。はしけを島の人間達がだして、そこで小銭を稼ぐということをやったりする。口之島の場合、潮の干満で、前之浜は珊瑚礁が発達していて、天然の珊瑚の割れ目に、ちょっと津口があって、満潮の時は、そこをつかって中型の船がはいれたんだけど、短い時間だったら

しい。昔から港湾の悪い条件のもとで密貿易が行われている。だから座礁事件なんかもあったようです。

深澤さんのコメントについては、口永良部は北緯 30 度の北にあるために、米軍統治を受けていないが、口永良部や硫黄島であるとか、北の島々のネットワークがトカラまでやってくるんです。だから船の問題でいうと、そういう議題でいいのではないか。港とか船の問題とかですね。それが多分、豊見山さんや深瀬さんが指摘しているみたいに、近世あたりになってそれらの海域世界が再編されるというんです。その段階でトカラは新しい状況の中に再編成されて位置づけなおされる。彼らの海域世界とのかかわりからいえば、性格的に変容してしまうと思ったんですが、いかがでしょうか。

豊見山：付け足しですが、山里先生の古代のトカラ、七島あたりを横目に見ながらの航海の問題について。南島路では寄港するという意識はあるのでしょうか。万が一遭難したら寄港できるということは想定しても、島に寄りながらというふうには、どうも・・・。

山里：僕もそれは考えたんですけど、先ほどの話と矛盾しますが、トカラの島影をみながら奄美から一気に屋久島や種子島までいったのかな。島に立ち寄るということは確かにむつかしい、とは思いますね。

豊見山：ついでに、渡辺さんが紹介した、七島へ寄港、艀舟で上陸、その下の史料に「然者七嶋之内へ異国舟到着候處、さんはん」とある。さんぱん、小船。これで陸揚げをし、ということですが、どうも七島の島々に渡るときには、具体的にどの島かはわかりませんけれども、直接接岸できないということがあります。それは珊瑚礁の島もそうですけれども。そのこともトカラの特徴として見られるのではないかと思います。

渡辺：さきほどのつけたしというか、一つは漂着民たちは船を直して出船しようと思って、木を下さい、材木を下さいと最初いうんですけれども、ないといわれてガクッとくるという、材木もないし港もないという様子がでてくるのが、さきほどの大きな木がないことに結びつくかと。あともう一つは、紹介した例なんですけれども、先ほどのその諏訪之瀬船の船頭が泊の人だったというのは、諏訪之瀬の人があの船頭やってたみたいなんですけど死んでしまったみたいなんですね、琉球で。そこでバトンタッチして、乗っていた傳兵衛という泊の人に頼んだということみたいです。

それから『通航一覧』という史料に、乗っていた者全員の宗教と、出身地と、名前と年齢が出ているんです。七島も含めて鹿児島の人たち全員どこどこの者、と書かれているんですが、琉球の水夫だけは那覇百姓というふうに、百姓とかいていて、こういう書き方の違いに何か意味があるのであれば、他の先生方に教えていただきたいと思うのですが。

豊見山：その点については私もわかりませんが、私の先ほどの報告での奄美に漂着した中国船を宝島商船とする問題ですが、これは『清代中琉関係档案続編』を使ったんですが、全く灯台下暗しで、評定所文書第1巻にありました。それをみたら、ちゃんと名前がでてました。中之島孝左衛門船[3]とでていて、詳細な奄美と琉球のやりとりの状況がわかりました。それから『歴代宝案』にも、そのいきさつが結構あります。ですから、宝島の商船というのは、具体的には中之島の船であるということで実態に近い状況の船とみてよい、大和船という薩摩沿岸の船ではなくて、トカラの船であるということははっきりしました。ですからその嘘八百を並べたような状況ではどうもないようです。

高良：評定所文書には確か中国船が奄美大島のほうで座礁して、積荷が重すぎて大和船に分載する、大和船のほうは無事に運天につくんだけれども、中国船は伊平屋島近海で難破する、あの座礁船。

豊見山：そうです。第一巻はよく読んでるつもりだったんだけれども、すっかり頭から消えてました。

深澤：質問してもよろしいでしょうか。

深澤：史料のなかでの地名表記と実態との関係ということですが、豊見山先生がご紹介されたさきほどの档案続編の最後のところ、「寶船至山北湖平灣」というふうな結びがあるかと思いますが、これは、こへんぞこ・・・

豊見山：ええ、これは湖辺底です。山原の名護市の。

深澤：評定所文書でも湖辺底ですか。

豊見山：そうです。

深澤：これは、つまり実態を反映している表記であると。

豊見山：正確な表記、表現ということですね。

深澤：どうもありがとうございました。

---

[3]中之島幸左衛門船とも。

高良：湖辺底に仮小屋つくって、そこに収容する。

高良：今回、歴史分野の報告がたくさんあって、随分トカラの見方、認識が広がり蓄積されたような気がするんです。ただ残念だったのは、考古学の池田先生が参加されていない。考古学側がどう見たか、気になるところですが、これは年明けに残ったメンバーでやろうと思っています。もう一つ、下野敏見先生という大変な業績を残されてきた方が描いたトカラと琉球について民俗と、それから言語のほうの二つの切口で問題を掘り下げていくことについて、文献派のほうはどのように感じますか。

豊見山：最近の考古学をもとに考えると、琉球方言がいつ出来たのか、琉球列島に九州からの南下のありかたでグスク時代頃だろうという議論がありますが、では習俗とか民俗、フォークロアと言語は、当然人間が南下してくるわけだから、九州と関係する言葉や体、顔つきというか、人そのものの共通性がみられる。そういう流れでみると、理解しやすいところはあるのではないかと思うんです。ではそれ以前の人たちはどうか。もともとの原住民の琉球人、その人たちの痕跡というのはどこにあるのか、全部入れ替わって制覇されてしまったのか。この問題が民俗学や言語学ではどのように解釈しているのか。大きな問題ですが、どうでしょうか。

狩俣：はい、特に考古学や形質人類学と言語学のあいだでおこった起源論争。金関丈夫と宮良当壮、服部四郎の論争なんです。言語学は考古学に不利な状況です。アメリカ国籍なのに日本語を話している人とか、人種と言語や文化の間にはいろんな場合があるわけで、言語はあとから大きく入れ替わることがあるわけですから、現在、日本語を話している人々が大昔から日本語を話していたというわけではない。ただし、少なくとも今日話されている宮古・八重山の方言は、基本的な単語は日本語と共通なので、金関丈夫のいう南方系の言語ということはないと思います。言語の問題と、考古学や歴史学や形質人類学の問題とは分けて考えなければならない。

それから、最近の考古学の研究から、10 世紀から 12 世紀くらいの波照間の遺跡の状況からすると、新しく人が入れ変わった可能性も考えていいと思うのです。それ以前の基層の人々の言語の痕跡が現在の八重山方言にないのか、という問題についてはこれまでの方言学は考えずに、「目」や「手」などの基礎語彙を調査したのです。そうではなくて基礎語彙以外の単語も調べないといけない。そうすると、北から南下して持ってこれないものがあるわけですね。亜熱帯特有の植物・動物・昆虫、魚の名称などに残っていないか、それから、その使い方、食べ方、薬草の効能のようなものの中に残っている可能性がありますから、そういう調査をしなければならない。そこは民俗学や他の分野と言語学が共同できる仕事だと思います。

それから宮古、八重山あたりへ行くと「タカータカ」とか、形容詞の語幹を重ねる言い方があるんです。日本語にも「高々と持ち上げると」とか「軽々と」とか形容詞の語幹を重ねる言い方があるんですが、宮古、八重山には特に多いんですね。そして、そういうのは北方系の言語よりも南方系の言語に多いそうです。だから、形式的には日本語なんだけれども使い方は南方系というのを探して比較していくことも必要です。

それからアメリカ人や中国人が日本語をどんなに上手に話していても、この人はアメリカ人、中国人というのがわかる時があるんですが、それは母語の話し方が持ち込まれるんです。宮古、八重山の話し方の中にそういう基層語の影がないか。宮古、八重山の人の話し方は、息をたくさん使うんです。たくさん息を使う言語が南方系にないかといったようなことまで考えてこなかったんですよ。今までの言語学は。発音記号で書いて、それだけを対象にする。発音記号でかいたものだけで満足する言語学から脱皮して、実際の発音のメカニズムを詳細にみていく作業が必要です。九州から南下してくるんですけれども、その言葉が上から覆い被さって、ごっそりいれかわったのか、混交したのか。混交したとするとその割合はどうだったか、ということを考えるときに発音のメカニズムがその材料になるのではないかと思います。

豊見山：ちょっと関連して、下野先生のいうトカラは基層は琉球文化だという場合に、それは南からあがってきたものだということをいっているのか、あるいは北から南へ南下していってそれがたまたまよく残っているから、ということなのか。民俗の事例や言語の状況で下野先生のいう琉球文化が基層だといういい方は、どの程度まで今支持できるんでしょうか。

狩俣：下野先生は琉球と九州の両方をよくご存じなので、そういう考えがあると思うんです。西南九州、特に離島ほど沖縄と共通のものが多いということは、南下していって、その南下が何度にもわたったとすると、はじまでいくのに時間がかかって、トカラと琉球で共通のものが多く残っているというのが一つの考えで、もう一つは、古い時代に共通だったものがそういううえからの覆い被さりがあるにも関わらず残っていたというのが、一つあるではないでしょうかね。どちらがいいかはにわかには決められないですね。どちらの可能性もあると思う。ただ、考古学がトカラをどう考えるかということは重要かな、と思います。形質人類学ではトカラ列島をどうみるか、期待するんですけれどね。今は古い人骨も調べられますから、DNA やらいろんなので。そういう成果を待たないといけない。

高良：下野先生がいっている議論は要するに、トカラと琉球の間にどういう文化交流があったかということに問題設定があるのではなくて、トカラ、南九州、琉球を包む基層文化が一つのベースになって、その上にもうひとつ大和から文明的な新しい状況がやって

きて、そういったものが融合したり重なったりする、そういう状況の中で、トカラを見る必要がある、ということではないのでしょうか。もうひとつ気になっている問題は、杉本信夫[4]という民族音楽をやっている人がいまして、彼が追究しているのは要するに船乗りの歌です。種子・屋久や奄美で謡われている民謡だとか、沖縄で謡われている歌、西表ではヤマトグチで謡う民謡がありますけど、明らかに船乗り達、船頭歌の系譜があるようだと指摘をしている。だからむしろ、海上で活動する彼らはどのようにして痕跡を残すのか、通常の人とは違ったかたちで痕跡を残すということについて、攻め方みたいなものを工夫しないとわからないところはあるかもしれませんね。例えば考古学的な調査をしたときに、定着した人間達はすぐわかると思うんだけれども、移動した人間達はどうつかまえられるのかという問題もある。だから民謡の系譜というか、つながりみたいなことも、多分これから一つの研究課題になるかなと思ったりするんですね。

狩俣：琉球方言研究は、今までは日本語と琉球語、あるいは本土方言と琉球方言というように大きく分けたところから発想するんですが、それだけではなくて、ふたつは地理的にも歴史的にもつながっているのに、共通のものをみつける作業をおろそかにした。琉球方言は 2000 年前に分岐したんですが、古い要素だけが残っているのではなく、分岐後も絶えず交流があり、どんどん新しいのが入ってきているにも関わらず、そういうのをあまり重視しないで古い現象をおっかけてきたのですが、それだけではなくて、どういうものがはいってきたか、それはどう入ってきたのか。古い時代からずっとつながっていて、南九州ほど琉球との共通の要素があるとすれば、九州とのつながりをよく見てみるという、考え方の転換が必要なんです。それが僕にとってはこの科研がきっかけになりました。歴史学の人たちは「交流」や相互関係のことをもっと考えるんでしょうけれども、方言研究者は大きな壁を乗り越えなくちゃいけないと思います。下野先生の考えをもう少し進めていかないといけないのではないかなと思います。

高良：琉球大学史学会がひらかれて、グスク研究をどういう視点で発展させていくか話し合い、私も加わったんです。かなり大雑把に整理すると、琉球の側で第二尚氏、具体的には尚円、尚真以降ですね、琉球側が国家的な編成を強くする。それ以前の三山であるとか第一尚氏段階は、権力としてがっちりした体制をつくるというよりも、周りの倭寇的状況というようなものに絡んだり、海民集団と絡んだり、そういうネットワークの中に成立するような政治形態をとる。琉球王国の初期段階というか形成段階で、もう周りの海域世界の中に、身をおいた緩やかな政治形態があり、そういった状況のなかでグスクが機能していることをどう考えていくか。要するに中世とか古琉球の琉球史像はもう少しダイナミックに描かなきゃいけないのではないか、という議論がグスク研究の中で

---

4 すぎもと　のぶお（南島文化研究所特別研究員）

出されていた。深瀬さんが提起してくれた問題でいけば、まさにトカラや奄美を含む、あるいは琉球の島々も含むそういう倭寇的性格を含む海域世界の動向に根ざしたような琉球の政治形態というものがある。それがある時期に変化した時、琉球側は自分のうちで国家としての足腰を固めていこうとする動きをする。それが尚真段階以降、それでグスクの実質的役割も終わっていく。グスクの終焉はそこだという話になった。だからトカラの問題を考えると、そのような海域世界の動きの中に位置付けて考えた時に、トカラという切口だけで歴史を考える必要はないということになると思う。ただ問題は、琉球側が 16 世紀以降そうなった段階で、トカラとの関係や薩摩侵攻以降の海上勢力は新たな制度的な体制下でどのように彼らのネットワークを再構築できたか、あるいはできなかったか。海上勢力としての伝統を持つ七島衆はどこへ行ったのか。

深瀬：島津氏と海上勢力について、少し述べさせていただきたいと思います。戦国期から近世初期における島津氏権力が決して一枚岩でなかったことは、これまでの研究で明らかになっています。このことは陸上だけでなく海上に対しても言えることで、島津氏権力は海上勢力を直接的には掌握できていなかったと思われます。では、島津氏がどのようにして海上勢力を掌握しようとしたかといいますと、陸からの支配、つまり主要な港を陸上から押さえて、港を通じて掌握するという方法がみられます。そのうえで、その港を拠点とするような有力な海上勢力を、港を管理する役人に任じることで、島津氏の被官にしていくのです。坊津や泊、内之浦といった島津氏領の主要港の役人たちを見ていきますと、ある史料では商人として、他の史料では島津氏の外交使節として、またある史料では島津氏の水軍として登場する一族もいます。このように南九州の主要港に拠点を持つ海上勢力をとりこむことで、島津氏は貿易や外交をおこない、さらには自らの軍事力として編成したいったと考えられます。但し、このように島津氏が自らの権力編成に本格的に取り込むことができたのは、16 世紀末頃で、ちょうど秀吉の朝鮮侵略がおこなわれていた時期あたりになります。

一方で、島津氏が陸上から支配できた薩摩半島や大隅半島と異なり、七島衆のような島嶼部を拠点とする海上勢力を掌握できるのは、大きく遅れて 17 世紀前半までずれ込んでいきます。先ほど、高良先生のお話にありましたように、島津氏による海上勢力の統制だけでなく、近世という時代の新しい社会秩序のなかで海上勢力が再構築するネットワークも含めて、これから丹念に検討していきたいと思います。

また、海上勢力のネットワークということで考えますと、七島衆を考えるときにトカラ列島に限定して考えてよいのかという疑問があります。例えば『歴代宝案』に出てくる熊普達事件というのがあります。琉球船が中国沿海で海賊行為を働き、明兵に捕まって外交問題にまで発展した事件です。この海賊行為に加わったメンバーの一人は、自分の出身地を「七島其甲山」と称しています。『歴代宝案』の訳注によれば、この島は喜界島に比定されていますから、七島の喜界島というとなんだか奇妙な感じがしますが、

七島衆にはトカラ列島出身の者ばかりでなく、喜界島のような周辺の島民も加わっていた可能性もあります。また、薩摩藩は七島衆に借銀を申し込みますが、同様に徳之島や沖永良部へも借銀を申し込んでいます。このようにみていきますと、七島と奄美諸島の島々が一緒に史料に出てくる場合があるのです。七島衆を考えるときには、トカラ列島だけでなく、薩南諸島の島々も含めて考える必要があるのではないでしょうか。

高良：豊見山さん、今日は深瀬さんが出した、なぜ七島が海上勢力として勃興してくるかという問題は、日本産の銀をめぐるネットワークや流通に七島衆がからんでいて、琉球にも関係しているという背景があるのではないでしょうか。

豊見山：つめて考えたわけではないんですが、やっぱり中世から戦国に入る頃までに、その前の状況で倭寇の活動というか、倭寇的状況と日本史研究ではいっているわけですけれど、そういう雑居した状況がずっとあるわけですね。那覇もそうですし、それから中国や朝鮮半島でも、日本人が雑居したり。九州でも中国人とかいろんな者たちも雑居しているという、荒野泰典さん[5]の議論があるんです。そういう雑居状態というのが、近世になると、みんなきれいに住み分けされてくるわけです。琉球もそうだし、日本もそうです。それからアイヌの菊池さん[6]の話をきくと、どうもアイヌのほうでも中世の段階では倭人なのかアイヌなのかよくわからない、両義的な人間というのが結構いるんだけれども、近世になると別格化され、倭人は倭人、アイヌはアイヌというふうにわけられてくるということを教えてもらいました。ところが、それ以前の状況では、那覇で日本人も朝鮮人も、それから中国人も雑居した状況で行動している。そういう中で、七島の人間達も全体的な動向としては海上勢力として活躍できる、そういう歴史的条件が前提にあったのではないかと。それが、薩摩藩だけでなくて日本の幕藩制の中で権力が整序化されてくると、それぞれの領域が固められてきて、家臣団編成だとか様々なかたちで統制が強まってくる。そうすると、トカラ衆、七島衆の活動も半下請けのようなものに変えられていくのではないか。

薩摩の人口史の研究で、非常に興味ぶかいと思うのは、薩摩藩の人口の割合を見ていると船に関わる人口が多いんですね。中世では深瀬さんが言うように、あまりその海運の勢力を抑えられなかった。それが近世になったときにも、抑えることは抑えるんだけれども、それでもかなり海運に従事する集団が薩摩の中にはある。そういうものを薩摩藩は近世に移行したときにどう掌握していくかというのは、大きな課題だったのではないかなと思うんです。

私の研究にひきつけると、薩摩藩の船が琉球を制圧するんです。その薩摩が琉球を制

---

5 あらの　やすのり（立教大学教授）
6 きくち　いさお（宮城学院女子大学教授）

圧すると、宮古、八重山とか沖縄の年貢の運送のメインルートを大和船が完全に抑えてしまう。その大和船は、薩摩藩自体がやるわけではなくて、民間に委託するという形をとるというのは、どうも薩摩側の船の勢力の突き上げというか、そういう問題とも関わってくるのではないかという印象です。それが薩摩藩、それから七島や阿久根の船頭たちとか、いくつかの港にいる船のあり方とかかわってくるのではないかというふうに思います。ちょっと七島からは離れたんですが、そういった大きな流れの中に、七島の船の海上勢力を想定できるのではないか、と思っています。

深瀬：豊見山先生がご指摘されたように、近世で薩摩藩は海運商を支援していますが、同じようなことは、七島衆が活躍した時代にもあるのではないかと考えています。七島衆は日向や大隅半島の佐多・根占からの海賊にしばしば襲われています。このことは、日向や大隅半島を拠点とする海上勢力と七島衆が、南九州や薩南諸島の海域をめぐって衝突することがあったことを示すのではないかと考えています。さらに注目されるのは、七島衆を襲った海上勢力、すなわち日向や大隅半島の海上勢力に対して、島津氏は琉球渡海朱印状を交付しているということです。日向や大隅の海上勢力は、渡海朱印状の交付という形で島津氏のバックアップを受け、南九州や薩南諸島の海域をめぐる勢力争いのなかで有利に立とうとしたのではないかとも考えられます。琉球渡海朱印状については、いろいろと議論されてきましたが、交付する島津氏側だけでなく、交付される海上勢力からの考察も必要になるのではないでしょうか。そして、島津氏が特定の海上勢力を支援するという形は、先ほど豊見山先生がご指摘されましたように、近世における薩摩藩と海運商との関係へと引き継がれていくのではないでしょうか。

高良：先の報告で鈴木さんが中之島調査をふまえて出された問題、とても重要だと思います。我々はどうも、頭の中ではそうは思っていないんだけれども、もともとのトカラというか、トカラの原像にシフトしようとする。現にあるトカラ、それをどう見ていくのか、今の地域社会はどうなっているんだろうか。それを考える大事さを鈴木さんはいったんだと思うんです。実は私も11月に口之島にいったときに、1950年代の写真をみせてもらったら、前之浜という集落の下の方に湧水がでていて、そこに棚田が展開している。それをみて、昔の水田状況のことばかり考えていた。ところが、鹿児島県の基盤整理事業で完全に棚田は姿を消し、現代化された。機械化を予定したらしいんだけれども、そんな機械を買って米作りをやる人はなく、結局は放棄された。たばこ家のばあちゃんの話をきいたら、昔の棚田の小さな水田が良かった、年寄りが作業できた、という話でした。手におえない水田になり、結局全然お米を作っていない。放棄されて雑草が生えている、基盤整理事業の残骸のような風景がありました。昔の写真を見て満足するのではなく、いかに島が変わったかということが大事なんです。要するに、トカラという生

きている地域社会、生きている人間達がつくっている地域社会で起こっている変化、変容の問題を理解するという眼を持ちながら議論していかなくてはならないと思ったんですが、例えば言葉の問題ではそれをどう理解するのか。

狩俣：言語接触の問題もあると思うんですね。中之島の東区でしたっけか、海岸沿いの温泉にはいったら、奄美方言が壁にかいてあったんです。ああいうふうに奄美からの移住者の言語がトカラ方言にどういうふうに混じっていくのか興味があります。それからトカラには鹿児島方言がたくさん入っているんですけど、鹿児島方言の影響が強くあって、トカラ方言の固有なものがどんどん失われていっていると思うんです。今の方言になるべく古い要素だけを探すというのではなくて、今の状況を調査する必要があると思います。このごろは言語接触とか、クレオール、琉球方言で言うとウチナーヤマトゥグチもちゃんと研究しようという態度があるんですけれども、今と同じ言語接触は百年前にも二百年前にも、五百年前にもあったわけで、昔の状況を想像するためにも、今の状況をみていくということが重要だと思います。

鈴木：中之島に民俗調査に行ったとき、西区の従来の民俗誌でたくさん書かれていたような話がほとんど聞けなくてですね。どうしようかということで民俗班の皆で話し合って、墓の現状についてやろうと決めたわけです。最初、苦し紛れから着手したようなテーマだったのですけれど、実はそれが島の現状を捉えるのにはいい視点ではないかということで、後で思い直した次第なんです。先ほど報告で赤嶺先生がいろいろご指摘されましたように、下野先生もおっしゃる基層文化で琉球に通じると思われるような事象は消えつつはあっても、その痕跡みたいなものは、中之島で今でも確かに聞くことはできるんです。

例えば無形民俗文化財にもなって、価値あるものとされている中之島の盆踊り。これは中身はヤマト式の芸能です。島の民俗としては、そのような要素も十分に時を重ね、定着しているわけです。ただし、西区ではこれも近年、もう踊らなくなってしまったそうです。島の歴史民俗資料館の館長さんも「無形民俗文化財が、本当の「無形」になってしまった」とおっしゃっておられました。ただその一方で、東区の方では盆踊りは盛んに行われていて、奄美の八月踊りを踊っています。そういう双方の動きについて記すことで、東区・西区の現在の民俗文化について、幾分かでも新しい視点ということで書けるだろうか・・・、という感じでおります。

赤嶺：私は既刊の報告書・論文などを参照して、トカラと沖縄の基層文化の共通点、比較可能な民俗、民俗語彙などを拾ってみたのですが、その場合、それらは比較はできますけれども、それがどの程度発展性のある議論に結びついていくのか、という不安も一方ではあるわけです。たとえばトカラと沖縄の間に共通性があるという場合、ではそれは

鹿児島や九州あたりではどうなっているかという問題、さきほど狩俣さんが言われたような手法を試みることが一つ手続きのうえで必要だと思います。

また、民俗学の方法論として、基層文化を探るという議論がどこまで説得力をもって展開できるのかということも問題でして、その点で民俗学は誤解されているところがあるようにも思います。民俗学をひっぱってきた柳田国男自体も、そういう基層文化ということを問題にしているところももちろんあるわけですが、むしろ主眼点は、民俗は変化するもので、その変化のあり様を捉えるべきだという点にあったとの指摘もあります。その意味では、この科研がスタートする段階では、1960年代に下野敏見先生らがされたような調査が今日できるはずはないから、現在のトカラをみる視点が必要だという話をしたのです。現在の民俗学の議論の流れからすれば、鈴木寛之さんがやったような方法が正当なもののように思われます。

山里：今回の科研で悪石島も調査させていただきましたが、先ほどの鈴木さんの報告にもありました民俗的変容ということを絡めていいますと、『十島村誌』メンバーとの交流会の時に、下野先生が私にこういうところがおもしろいよ、と話してくれたのが、修験の南下の問題なんですね。実は下野先生自身がすでに「トカラ列島の修験道文化」という題で、『南島文化』に書かれていますが、その中に悪石島の石に九字が彫られている写真があったもんですから、非常に興味をもってわたったわけです。それで悪石島へ行ってきました。泊まった西荘の方にたまたま案内してもらったんですけれども、写真に出てた石は確認できました。それは道路の整備に伴って、もともとあったところからは移動したようですが、誰にも知らない状態でぽつんとありました。それは下野先生の文章の中には書かれていなかったんです。もう一か所にも九字石があったんですね。コケが生えていて、コケを落としていたら、やっぱり九字の形が出てきました。そういう九字石は下野先生は修験道の影響があったんだろうと指摘されましたけれども、現時点ではほとんどトカラの人ですら忘れ去られていて、どこに何があって、どう機能していたのかということもわかっていない状態なんです。で、それはちょっと動いたとはいっても、だいたい立てられている位置は集落に入る北と南の、どうも道路の境界においてあるようなんです。それで、そういったものがなくなりつつあるなあと感じました。

下野先生の『トカラ列島民俗誌』では、その石を石敢當と明示してありまして、先生はそういうふうに認識していたんだということがわかったのですけれども、実は喜界島に九字の入った石敢當があることを窪徳忠の本で知っていましたので、悪石島の帰りに喜界島へ行ってそれを見てきました。自然の石に彫られたものはほとんど見えなくなっていましたが、セメントで造られた比較的新しい石敢當ではよく見えます。徳之島にも九字が入った石敢當があるようで、それを確認しに行く予定でいます。このように奄美までは、修験の影響ではないかといわれる足跡がみつかっていますが、沖縄・宮古・八重山にはそうした痕跡は今のところありません。

戻りますが、悪石島には、九字石だけではなくて、ある家には文書が残っているようです。『トカラ列島民俗誌』でも紹介されていますが、その文書の所蔵している門が、今はもう見ることはできないけれども、下野先生が調査された段階では壊れてなくて、門の上部がちゃんと九字の形になっているんです。鈴木さんの報告を聞きながら民俗的変容に関連して感じましたことは以上です。

高良：ありがとうございました。皆さんから有意義なコメントをいただいて、さらに議論を深めたいところですが、時間となっています。今回のワークショップはここまでといたします。長い時間ありがとうございました。

文字化：高良由加利
伊地知裕仁
青木一桂（琉球大学教育学部学生）
麻生伸一（琉球大学教育学部学生）
記録：仲間恵子

トカラ列島研究文献一覧

高 良 由 加 利・曳 田 和 彦

〔凡例〕
・トカラ列島（現十島村）の研究に関する文献を、年代別に整理し、五十音順で掲載した。
・自然系、及び経済関係の資料、行政資料は原則として省略した。
・「」は論文名、『』は出版物名を意味する。
・記載順は、編者名、論文名、発行所名である。「：」は記載内容を示す。「＊」は再収録・復刻を示す。
・旧漢字は新漢字に改めた。

1884（明治 17）
白野夏雲『七島問答』（鹿児島県立図書館蔵）
白野夏雲『十島図譜』

1885（明治 18）
赤堀廉蔵『島嶼見聞録』（鹿児島県立図書館蔵）

1886（明治 19）
赤堀廉蔵『鹿児島縣諸島ノ實況』

1890（明治 23）
田代安定「薩南諸島ノ風俗余事ニ就テ」『東京人類学会雑誌』6－55・56・57・60 東京人類学会

1893（明治 26）
笹森儀助『拾島状況録』
＊『日本庶民生活史料集成』（第 1 巻）三一書房 1986 に再録

1898（明治 31）
鹿児島県私立教育会　編　『薩隅日地理纂考』鹿児島県私立教育会

1914（大正 3）
原田長治『川辺郡誌』（国立国会図書館蔵）

1915（大正 4）
島津家編輯所　編　『三国名勝圖繪』10(巻之二十八)
＊南日本出版文化協会より 1966 年に復刻

1916（大正 5）
土井暁風「川辺十島の話」『郷土研究』4－3 郷土研究社

1930（昭和 5）
三元社　編「鹿児島県大島郡悪石島の玩具と土佐玩具」『旅と伝説』3－4 三元社

1932（昭和 7）
敷根利治「宝島方言集」『方言』2－1 春陽堂

1933（昭和 8）
十島村役場　編『十島図譜』単美社
敷根利治「各地の婚姻習俗　鹿児島県十島村」『旅と伝説』6－1＜婚姻習俗号＞三元社
敷根利治「各地の葬礼　鹿児島県十島村」『旅と伝説』6－7＜誕生と葬礼号＞三元社
敷根利治「各地の誕生習俗　鹿児島県十島村」『旅と伝説』6－7＜誕生と葬礼号＞三元社

1934（昭和 9）
高橋文太郎「奄美十島及大島に於る民具」『旅と伝説』7－8 三元社
内藤喬「十島農業雑記」『農学会報』2 鹿児島高等農林学校
三宅宗悦「薩南十島探訪挿話」『ドルメン』202 岡書院
早川孝太郎「踊りの着物－薩南十島にて－」『旅と伝説』7－8 三元社

1935（昭和 10）
早川孝太郎「十島採訪だより」『アチックマンスリー』2

1936（昭和 11）
内藤喬「硫黄島・中之島及悪石島」『鹿児島高農校友会会誌』27
早川孝太郎「悪石島正月行事聞書—鹿児島県大島郡十島村」日本民族学会　編『民族学研究』2－1 三省堂
早川孝太郎「悪石島見聞記」日本民族学会　編『民族学研究』2－3 三省堂

1937（昭和 12）

島袋源一郎「薩南列島に於ける平家の遺跡」『沖縄教育』247 沖縄県教育会

1940（昭和 15）

桜田勝徳「宝島の自給民具」『民族文化』1－7 山岡書店

吉町義雄「吐噶喇諸島方言」『旅と伝説』13－4 三元社

三宅宗悦「南島の先史時代」『人類学・先史学講座』16 雄山閣

鹿児島県教育委員会　編『鹿児島県史』2 鹿児島県

1941（昭和 16）

桜田勝徳「宝島のユーブ制」『旅と伝説』14－1 三元社

鹿児島県教育委員会　編『鹿児島県史』3 鹿児島県

1942（昭和 17）

河村只雄「薩南諸島・琉球の島々」『続南方文化の探究』創元社

1943（昭和 18）

桜田勝徳「薩南宝島の正月さま」『民間伝承』8－9 民間伝承の会

桜田勝徳「出漁者と漁業移住」柳田國男　編『海村生活の研究』日本民俗学会

1949（昭和 24）

桜田勝徳「宝島の親方取り」『民間伝承』13－7＜「海村生活」特集号＞民間伝承の会

柳田国男「七島正月の問題」『民間伝承』13－1 民間伝承の会

1950（昭和 25）

東恩納寛惇『南島風土記』沖縄文化協会・沖縄財団

1951（昭和 26）

桜田勝徳「寄物のこと　宝島の寄物」『民間伝承』15－11 日本民俗学

1952（昭和 27）

酒井卯作「西南諸島雑記」『民間伝承』16－11 日本民俗学

三友国五郎「トカラ列島巡見記」『地域』1－5 日本書院

三友国五郎「薩南諸島の先史地理的調査」『埼玉大学紀要（人文・社会科学篇）』2

柳田国男「海上の道」『心』5－10・11・12 酣燈社

1953（昭和 28）

鳥越憲三郎「トカラ十島の巫女組織」『宗教研究』137 日本宗教学会

1954（昭和 29）

海上保安庁　編『台湾・南西諸島水路誌』

筒井嘉隆　編『トカラの島々』〈アサヒ写真ブック２〉朝日新聞社

伊豆川浅吉「小宝島のことども」『しま』4 全国離島振興協議会

鳥越憲三郎「島に渡るには（種子・屋久・十島の巻）」『しま』4 全国離島振興協議会

三友国五郎「トカラ列島誌」『埼玉大学紀要（人文・社会科学篇）』3

1955（昭和 30）

岩波書店　編『岩波写真文庫 148　忘れられた島』岩波書店

酒井卯作「宝島の稲作」『鹿児島民俗』6　鹿児島民俗学会

森克己『遣唐使』至文堂

1956（昭和 31）

宮本常一「宝島の神酒づくり」『酒』412 酒の友社

1957（昭和 32）

鳥越憲三郎「トカラの島々―宝島の生活―」豊中市立民俗館　編『民俗』1－1 豊中市立民俗館

鳥越憲三郎「続トカラの島々―中之島の生活―」豊中市立民俗館　編『民俗』1－2 豊中市立民俗館

1958（昭和 33）

早川孝太郎「吐噶喇列島の民具」　日本常民文化研究所　編『日本の民具』角川書店

宮本常一「薩南十島」（島めぐり３）『しま』15 全国離島振興協議会

村田熙「白野夏雲稿『七島問答』（書誌紹介）」『鹿児島民俗』20 鹿児島民俗学会

1959（昭和 34）

相田孝昭「鹿児島県小宝島の油売りの話（鹿児島郡十島村）」『伊予路』4 愛媛民俗学会

谷川雁「びろう樹の下の死時計」『中央公論』８・９月号中央公論社

＊1996『谷川雁の仕事Ｉ』河出書房新社発行に再収録

1960（昭和 35）

大山彦一『南西諸島の家族制度－マキ・ハラの調査－』関書院

鹿児島県　編『三島・十島農林業の実態』

農林省鹿児島統計調査事務所　編『農業集落調査結果』

飯田博「島の現実―宝島―」『しま』21 全国離島振興協議会
大山彦一「トカラ諸島の社会学的研究」『鹿児島大学南方産業科学研究所報告』2
薩摩藩「薩藩政要録」『鹿児島県史料集』1 鹿児島県
栄信子「十島村宝島」『奄美民俗』創刊号　鹿児島県立大島高等学校郷土研究クラブ
『長門本平家物語　巻第四』国書刊行会
平凡社　編『風土記日本』1 九州・沖縄編　平凡社
宮本常一・山本周五郎・楫西光速・山城巴　監修『日本残酷物語』2 平凡社

1961（昭和 36）
大城立裕・嘉陽安男・船越義彰『悪石島－疎開船学童死のドキュメント－』文林書院
野村孝文『南西諸島の民家』相模書房
田代安定『民俗慣行としての隠居の研究』未来社
内藤喬『鹿児島民俗植物記』鹿児島民俗植物誌刊行会
伊藤幹治「宝島の宗教と社会の構造的理解」『国学院大学日本文化研究所紀要』8
伊藤幹治「宝島の宗教儀礼の諸相」『日本民俗学会報』18 日本民俗学会
伊藤幹治「離島の正月行事と祖先祭―宝島(1)」『宗教公論』31－1 宗教問題研究所
伊藤幹治「選ばれた神役達の生活―宝島(2)」『宗教公論』31－2 宗教問題研究所
伊藤幹治「閉ざされたシマと開かれたシマ―宝島(3)」『宗教公論』31－3 宗教問題研究所
小川徹「南西諸島における親族呼称とその分布構造」『法政大学文学部紀要』7－2
内藤喬「鹿児島県民俗植物誌」『鹿児島民俗』5－3・4 鹿児島民俗学会

1962（昭和 37）
小川徹「南西諸島における親族呼称」日本民族学協会　編『民族学研究』27－1 誠文堂新光社
村田熙「鹿児島の夏まつり」『まつり通信』17 まつり同好会

1963（昭和 38）
田代安定「薩南諸島の風俗余事について」『民俗研究』1 鹿児島民俗学会
赤堀廉蔵「鹿児島県諸島の実況」『民俗研究』1 鹿児島民俗学会
内藤喬『鹿児島民俗植物記』鹿児島民俗植物記刊行会

1964（昭和 39）
秋吉茂『美女とネズミと神々の島－かくれていた日本－』河出書房新社
上村孝二「薩隅方言の区画」『日本の方言区画』東京堂
牛島盛光「宝島大池遺跡の調査概報」中国四国歴史・地理学協会・西日本史学会合同秋季学術大会発表要旨

円山進「南西諸島十島村の振興計画」『しま』40 日本離島センター
下野敏見「吐噶喇列島」(現地報告 31)『しま』41 日本離島センター

1965 (昭和 40)
小川徹「南西諸島における親族集団呼称の若干に関する年代論的知見—社会地理学的方法による一つの試み—」日本民族学会　編『民族学研究』30－1 誠文堂新光社
折田兼完『畧解七島問答』十島村役場
下野敏見『吐噶喇列島民俗誌　第 1 巻－平島・悪石島編－』
文化財保護委員会　編『正月の行事　1－鹿児島県・大分県』＜民俗資料叢書 4＞平凡社
伊藤幹治「黒島の社会と宗教の構造と変化」『国学院大学日本文化研究所紀要』17
クライナー　ヨーゼフ「トカラ・悪石島の仮面行事」日本民族学会　編『民族学研究』30－3 誠文堂新光社

1966 (昭和 41)
桜田勝徳「鹿児島県大島郡十島村宝島」日本民俗学会　編　『離島生活の研究』集英社
平山輝男編『琉球方言の総合的研究』明治書院
村田熙「下野敏見　『トカラ列島民俗誌—悪石島・平島』(書誌紹介)」『鹿児島民俗学会報』10－3 鹿児島民俗学会
『李朝実録　琉球関係資料』中央公民館内郷土史研究会

1967 (昭和 42)
柳田国男『海上の道』筑摩書房
牛島盛光「宝島の祭祀儀礼と社会構造—調和と分解」『日本人類学会・日本民族学会連合大会』第 16 回記事
平山輝男「トカラ群島・屋久島・種子島の方言」『国語学』69
野口武徳「小離島社会の村落生活と変化—トカラ列島臥蛇島—」『民族学研究』32－2 日本民族学会
ヨゼフ　クライナー「南西諸島における神観念・他界観の一考察」『沖縄文化』23 沖縄文化協会

1968 (昭和 43)
森重孝『かごしまの俗信と病気』
小川亥三郎「十島村における修験者の足跡」『南島民俗』3 南島民俗研究会
斎藤毅「南西諸島における漁村の予察的研究」『鹿児島地理学会紀要』16
名越左源太「南島雑話」宮本常一・原口虎雄・比嘉春潮　編『日本庶民生活史料集成』1

三一書房

1969（昭和 44）

上村孝二「書評　平山輝男編『薩南諸島の総合的研究』」『国語学』80

平山輝雄　編『薩南諸島の総合的研究』明治書院

:「総論」「地理的環境」「社会的環境と生活」「言語」

稲垣尚友『種子島遭難記－坂元新熊談－』ボン工房

稲垣尚友『悪石島の地名』ボン工房

小野重朗「悪石島のボゼ」『南九州の民具』慶友社

桜井徳太郎「民間巫俗の性格－巫女の口寄せと死霊信仰－」肥後先生古希記念論文刊行会編『日本民俗社会史研究』弘文堂

下野敏見「口之島の盆踊り」『南島民俗』10 南島民俗研究会

下野敏見「トカラ列島の神祭りと七月行事について」『南島民俗』11 南島民俗研究会

下野敏見「宝島の神々と信仰」『南島民俗』12 南島民俗研究会

下野敏見「トカラ列島の年中行事表（旧暦）」『南島民俗』13 南島民俗研究会

下野敏見「トカラ列島民俗資料(一)口之島の年中行事」『南九州郷土研究』3 南九州郷土研究会

鶴藤鹿忠「薩南諸島の民家」『岡山県私学紀要』5 岡山県私学協会

鎌田久子「トカラの盆踊」『民俗芸能』37＜特集　南島の民俗芸能＞民俗芸能学会

野見山温　編『道之島代官記集成』福岡大学研究所

藩法研究会編『藩法集　鹿児島藩』上下　創文社

三友国五郎・河口貞徳「宝島浜坂貝塚の調査概要」『埼玉大学紀要社会科学篇』11 埼玉大学

1970（昭和 45）

国分直一『日本民俗文化の研究』(考古民俗叢書)慶友社

東喜望「南島疫病考－吐咖喇・奄美の疱瘡と呪－」『沖縄文化』32 沖縄文化協会

上村孝二「(書評）平山輝男編『薩南諸島の総合的研究』」『国語学』80 日本語学会

小川亥三郎「宝島の祝詞」『日本民俗学』67 日本民俗学会

小野重朗「二つの負い縄文化」『民具マンスリー』3－8 日本常民文化研究所

小野重朗「海と山の原郷－南島文化二元論」『叢書わが沖縄』6 木耳社

桜田勝徳「宝島の家普請に関する儀礼」『日本民俗学』67 日本民俗学会

桜田勝徳『海の宗教』淡交社

下野敏見「ノロとネーシの祭具」『民具マンスリー』3－8 日本常民文化研究所

下野敏見「トカラ列島のクリ舟」『民俗研究』5 鹿児島民俗学会

下野敏見「薩南諸島の民俗－南北文化の接触地帯」『未来』42 未来社

下野敏見「吐噶喇列島の屋内神の種類」『南島民俗』15 南島民俗学会
下野敏見「吐噶喇列島の葬送習俗と墓制」『南九州郷土研究』4 南九州郷土研究会
下野敏見「トカラ列島「ヒチゲー」考」『鹿児島民俗』48 鹿児島民俗学会
下野敏見「吐噶喇列島の通過儀礼および分家・相続・隠居」『南九州郷土研究』5 南九州郷土研究会
西元耕司「宝島における集落と土地利用」『鹿児島地理学会紀要』18 鹿児島地理学会
日高和広・吉田昭穂「宝島及び悪石島における焼畑農業」『鹿児島地理学会紀要』18 鹿児島地理学会

1971（昭和 46）

稲垣尚友『トカラの伝承』ボン工房
稲垣尚友『十島村誌　臥蛇島篇資料(一)臥蛇島金銭入出帳』かんぺい工房
牛島盛光「トカラ列島・宝島の社会と習俗」『比較民俗学論考－南九州・沖縄の社会と習俗－』青潮社
鹿児島藩(原口虎雄校訂)『薩隈日地理纂考』　鹿児島県地方史学会
川田正『口之島の気象』
家村睦夫「中之島の音韻について」『鹿児島地理学会紀要』9－2 鹿児島地理学会
小野重朗「正月の構造」『日本民俗学』78 日本民俗学会
小野重朗「七島正月について」『鹿児島民俗』50・51 鹿児島民俗学会
川崎晃稔「薩南諸島における丸木舟の一考察」『南島民俗』21 南島民俗学会
熊本大学探検部「宝島調査報告書」『飛翔』創刊号 1971
下野敏見「田芋の民俗」『南九州郷土研究』14 南九州郷土研究会
下野敏見「トカラ列島の仮面神ボゼについて」『民俗学評論』7 大塚民俗学会
下野敏見「カツオ漁の民俗」『鹿児島の観光』4
下野敏見「南島の通信法」『鹿児島民俗』53 鹿児島民俗学会
鹿児島県明治百年記念館調査室　編『トカラ列島有形民俗資料調査報告書』鹿児島県明治百年記念館建設調査室
鳥越皓之「焼畑村落の土地制度と村落構造　鹿児島県大島郡川辺十島」『民俗学評論』7 大塚民俗学会
長沢和俊「宝島民俗誌」『鹿児島短期大学研究紀要』7
東利江子「年中行事　大島郡十島村諏訪之瀬島」『葛山民俗』6 鹿児島東高校生徒会民俗研究部
日高和広「薩南諸島北部における焼畑農業地域の研究」『鹿児島地理学会紀要』19－1 鹿児島地理学会
斎藤毅「中之島および宝島における野生植物の利用形態」『鹿児島地理学会紀要』19－2 鹿児島地理学会

藤巻恵子「吐噶喇列島の離島性について」『鹿児島地理学会紀要』19－2 鹿児島地理学会
安田宗生「悪石島の盆行事とボゼ祭り」『民俗学評論』6 大塚民俗学会
坂口彰「中之島における開拓部落とその変容」『鹿児島地理学会紀要』19－2 鹿児島地理学会
白木原和美「悪石島の土師器」『薩琉文化』1－2 鹿児島短期大学南日本文化研究所
白木原和美「悪石島の土師器」『薩琉文化』1－3 鹿児島短期大学南日本文化研究所
鳥越皓之「焼畑村落の土地制度と村落構造」『民俗学評論』7 大塚民俗学会
比嘉春潮「『旅行心得之條々』」『蠹魚庵漫章』勁草書房

1972（昭和 47）
稲垣尚友『十島村誌　臥蛇島篇資料(二)臥蛇島部落規定』ボン工房
小野重朗『十五夜綱引の研究』慶友社
鹿児島県明治百年記念館建設調査室　編『鹿児島県の正月行事』
貴島玲子「トカラ列島における通婚圏の研究」『鹿児島地理学会紀要』20－1 鹿児島地理学会
坂口彰・中島仁志「口之島におけるミズイモ栽培」『鹿児島地理学会紀要』20－2 鹿児島地理学会
原田稔「諏訪之瀬島の八月踊りについて」『鹿児島民俗』56・57 鹿児島民俗学会
安田宗生「トカラ・悪石島のネーシに関する覚書」『民俗学評論』9 大塚民俗学会
安田宗生「トカラ・悪石島の葬送儀礼」『日本民俗学』82 日本民俗学会
安田宗生「南島における畑作と年中儀礼―トカラ列島の事例を中心として―」『日本民俗学』83 日本民俗学会
前元豊新「吐噶喇列島の民間信仰と村落共同体の研究」『鹿児島県地理学会紀要』20－1 鹿児島地理学会
掛谷誠「小離島住民の生活の比較研究－トカラ列島，平島・悪石島－」『民族学研究』37－1 日本民族学会
前本豊新「吐噶喇列島の民間信仰と村落共同体の研究」『鹿児島地理学会紀要』鹿児島地理学会
鶴藤鹿忠『琉球地方の民家』明玄書房

1973（昭和 48）
稲垣尚友「ネーシ（巫女）覚え書」『季刊　柳田国男研究』創刊号　季刊柳田国男研究編纂委員会
稲垣尚友『トカラの地名と民俗』上・下　ボン工房
金丸三郎「鹿児島県と離島」『しま』72 日本離島センター
川崎晃稔「薩南諸島における刳舟製作儀礼」『南島民俗』34 南島民俗学会

下野敏見「薩南諸島の盆踊り」『まつり』21 まつり同好会
鈴木宣則「過疎離島における投票行動の研究－鹿児島郡十島における事例を中心として－」『鹿児島大学教育学部紀要』（人文・社会科学）24

1974（昭和 49）

日本離島センター　編『離島振興 20 年の歩み』日本離島センター
川崎晃稔「薩南諸島における刳舟製作儀礼－種子島の場合を中心にして－」『まつり』23＜特集南島のまつり＞まつり同好会
赤松国吉「吐噶喇列島における過疎化と土地利用の変化－中之島及び臥蛇島の場合－」『鹿児島地理学会紀要』21－2 鹿児島地理学会
川崎晃稔「トカラの刳舟製作工程とその習俗」『南島民俗』35 南島民俗学会
川崎晃稔「薩南諸島の刳舟製作にみる山降ろしの習俗－方法と共同労働を中心に－」『南島民俗』36 南島民俗学会
斎藤毅「吐噶喇列島における漁業の特性」『鹿児島地理学会紀要』21－2 鹿児島地理学会
宮本常一「宝島民俗誌」『宮本常一著作集』17 未来社
安田宗生「鹿児島県十島村の男巫女」『西郊民俗』66 西郊民俗談話会
吉町義雄「吐噶喇諸島方言」『日本民俗誌大系』10 角川書店

1975（昭和 50）

稲垣尚友『平島放送速記録』1 ボン工房
石飛一吉・西園玲子「宝島および小宝島における正月料理の特性」『鹿児島地理学会紀要』22 －1 鹿児島地理学会
川崎晃稔「南島の独木船　3 トカラ列島のスィブネ」『えとのす』3 新日本教育図書
川崎晃稔「薩南諸島における刳舟の推進具」『鹿児島民俗』65 鹿児島民俗学会
斎藤毅・木佐貫秀明「吐噶喇列島における山羊飼育の文化地理学的意義－宝島および小宝島の場合」『鹿児島地理学会紀要』22－1 鹿児島地理学会
下野敏見「宝島民具の特性について」『鹿児島民俗』63・64 鹿児島民俗学会
南島研究会　編『柳田國男先生稿　南島旅行見聞記』南島研究会
安田宗生「悪石島の農耕と年中行事」『えとのす』4 新日本教育図書
白木原和美「トカラ海峡」『えとのす』2 新日本教育図書
白木原和美「類須恵器の出自について」『法文論叢』36 熊本大学法文学会
申叔舟『海東諸国紀』国書刊行会
田尻英三「トカラ列島(中之島・平島)のアクセントと語彙」『文研究』(春日和男教授還暦記念特輯号)39・40 九州大学国語国文学会
東四郎(他)「薩南諸島における伝承的薬用及び毒性植物調査報告 1　種子島、屋久島、口永良部島、トカラ列島」『鹿児島大学理学部紀要 地学・生物学』8 鹿児島大学理

学部
村田熙『鹿児島県』(日本の民俗 46) 第一法規出版
村田熙「悪石島の盆踊とボゼ」『鹿児島県文化財調査報告書』22 鹿児島県教育委員会

1976 (昭和 51)
宮本常一『南の島を開拓した人々』さ・え・ら書房
鹿児島県庁 編『鹿児島県地誌』(鹿児島県史料集成 16 輯)鹿児島県立図書館
下野敏見「トカラの霜月祭り」『まつり』27<特集南島のまつりII>まつり同好会
下野敏見「南西諸島のヘラについて」『海南民俗研究』1海南民俗研究所
下野敏見「道の島の風と潮(2)」『海南民俗研究』1海南民俗研究所
下野敏見「宝島の初穂儀礼」『鹿児島民俗』66・67 鹿児島民俗学会
下野敏見「小宝島民俗小誌」『みなみの手帖』16
下野敏見「道之島の風と潮 I」『隼人文化』2 隼人文化協会
稲垣尚友『吐火羅国ー針の穴から日本をのぞくー』八重岳書房
鳥越皓之「日待講からみたムラの生活と社会構造」『仏教大学研究紀要』60 仏教大学学会
向山勝貞「南九州における仮面の研究ーその諸類型についてー」『古代・中世の社会と民俗文化』(和歌森太郎先生還暦記念) 弘文堂
池田裕子・上之薗雅代・井出ゆみ子「口之島における年中行事とその料理形態について」『鹿児島地理学会紀要』22ー2 鹿児島地理学会
斎藤毅「口之島「御宮祭次第書」について」『鹿児島地理学会紀要』22 鹿児島地理学会
斎藤毅・河津優司「宝島における「イタツケ」漁船について」『鹿児島地理学会紀要』22 ー1 鹿児島地理学会
田村克巳・加藤哲夫・加藤一幸・福永敏夫「口之島の村落構造に関する覚書」『鹿児島地理学会紀要』22ー2 鹿児島地理学会
下野敏見「調査地区の概観」『トカラ列島有形民俗資料調査報告書』鹿児島県教育委員会
宮本常一・宮田登 編『早川孝太郎全集 9 島の民俗』未来社
:「薩南十島を探る」「踊りの着物ー薩南十島にてー」「十島採訪だより」「悪石島正月行事聞書ー鹿児島県大島郡十島村ー」「悪石島見聞記」「悪石島を訪う」「吐噶喇列島の民具」
宮本常一「早川さんの島の旅」宮本常一・宮田登 編 『早川孝太郎全集 9 島の民俗』未来社
宮本常一「宝島民俗誌」『宮本常一著作集 17』未来社

1977 (昭和 52)
稲垣尚友「島影が襲いかかってくるー離島逃亡生活」『伝統と現代』43 共同体論 伝統と現代社

小野重朗『神々の原郷』法政大学出版局
クライナー　ヨーゼフ・住谷一彦『南西諸島の神観念』未来社
桜井徳太郎『日本のシャーマニズム』下巻　弘文堂
斉藤毅「奄美諸島および吐噶喇列島における伝統的製塩形態の地理学的研究」『人類科学』30 九学会連合
下野敏見「鹿児島の仮面行事」『えとのす』8 新日本教育図書
下野敏見「南西諸島の司祭・巫女と内侍」『南島研究』18 南島研究会
下野敏見「南西諸島の山刀について」『海南民俗研究』2 海南民俗研究会
下野敏見「薩南諸島の製塩民俗」『日本塩業大系・特論民俗』日本専売公社
鳥越皓之「トカラ列島の漁業組織と漁業技術」『人類科学』30 九学会連合
内藤莞爾『西南九州の末子相続』御茶の水書房
東喜望「無人島諏訪之瀬島開拓の先駆者－藤井富傳翁伝記資料考説」『奄美郷土研究会報』17 奄美郷土研究会
村田熙「種子・屋久・トカラ列島の山岳信仰」中野幡能　編『英彦山と九州の修験道』山岳宗教史研究叢書 13 名著出版

1978（昭和 53）
五十嵐忠孝「吐噶喇列島人口誌」『鹿児島地理学会紀要』23 －1・2 鹿児島地理学会
稲垣尚友『山羊と芋酎』未来社
稲垣尚友「私の調査法」米山俊直他　編『民衆の生活と文化』未来社
大塚柳太郎・口蔵幸雄・門司和彦「トカラ列島平島における漁活動と食生活」『人類科学』31 九学会連合
川崎晃稔「南島の刳船」国分直一　編『論集　海上の道』大和書房
北村伸造・神谷泰光　編『トカラ列島　フィールドノート・中之島』佛教大学社会学部鳥越ゼミナール
国分直一・白木原和美「道の島の考古学」『えとのす』9 新日本教育図書
下野敏見「トカラ巫女の神口」『奄美・沖縄民間文芸研究』創刊号　奄美・沖縄民間文芸研究会
下野敏見「南日本の民具と基層文化」『隼人文化』4 隼人文化協会
下野敏見「田の神の系譜」『鹿児島雑筆』53
下野敏見「南日本の来訪神」『日本民俗学』115 日本民俗学会
下野敏見「荒神の系譜」『南島民俗』31 南島民俗研究会
下野敏見「おとずれ神－南日本の来訪神をめぐって」『講座　日本の民俗』6
下野敏見「南西諸島の昔話」『昔話研究』7
下野敏見「小形馬とオモゲー」『民具マンスリー』10－9
西元耕司「奄美大島および宝島におけるリュウキュウバショウの利用に関する地理学的研

究」『鹿児島地理学会紀要』19－1 鹿児島地理学会
白木原和美「悪石島の外国陶磁」『文学部論叢』17 熊本大学文学会
白木原和美「南西諸島の類須恵器—シナ海半月弧文化圏—」『えとのす』9 新日本教育図書
白木原和美「トカラ通信」『えとのす』9 新日本教育図書
白木原和美「クガニイシ」『法文論叢』41 熊本大学法文学会

1979（昭和 54）
稲垣尚友・文　大島洋・写真『海上の集落－薩南諸島トカラ』ナツメ社
十島村教育委員会　編『十島村文化財調査報告書』1 十島村役場
川寄兼孝「立証名寄帳写（口之島史料）」『十島村文化財調査報告書』1 十島村役場
川寄兼孝「口之島肥後家々系図」『十島村文化財調査報告書』1 十島村役場
川寄兼孝「口之島郡司横目速署願書」『十島村文化財調査報告書』1 十島村役場
川崎晃稔「薩南諸島のアカトリ」『南島民俗』41 南島民俗研究会
熊本大学法文学部考古学研究室『タチバナ遺跡』研究活動報告 4 熊本大学法文学部考古学研究室
下野敏見「南九州・奄美における社会と民俗学」『日本民俗学』122 日本民俗学会
下野敏見「吐噶喇列島の修験道文化—修験道の南下とその受容」『隼人文化』6 隼人文化協会
下野敏見「中之島盆踊り」『十島村文化財調査報告書』1 十島村役場
下野敏見「悪石島盆踊り」『十島村文化財調査報告書』1 十島村役場
下野敏見「紅頭嶼の食物と南西諸島」『南島研究』20 南島研究会
下野敏見「紅頭嶼・台湾・八重山の民俗」『海南民俗研究』3 海南民俗研究所
下野敏見「南島の鋸歯文と関連紋様」『海南民俗研究』3 海南民俗研究所
下野敏見「南九州およびトカラ列島の御幣」『民具マンスリー』12－6
下野敏見「トカラ列島のスブネ」『民俗研究』5 鹿児島民俗学会
鈴木継美「戸籍を用いた歴史人口の復元－とから列島口之島の事例」『民族衛生』45－3 日本民族衛生学会
鈴木継美「除籍簿と住民登録人口により再構成された出生と死亡－とから列島口之島の事例」『民族衛生』45－3 日本民族衛生学会
鳥越皓之「離島の過疎問題と住民の対応」『桃山学院大学社会学論集』12－2 桃山学院大学社会学会
鳥越皓之「離島の観光開発の課題と問題点－トカラ列島民の地域開発への対応」山岡栄市教授古稀記念論文集編集委員会　編『地域社会学の諸問題』山岡栄市教授古稀記念論文集　晃洋書房
笹森儀助「十島状況録」『日本庶民生活史料集成』1 三一書房

1980（昭和55）

伊藤義教「再説「ゾロアスター教徒の来日」」『朝日ジャーナル』9

稲垣尚友『悲しきトカラ』未来社

榎一雄「『日本書紀』の吐火羅国と舎衛」『朝日ジャーナル』8

熊本大学文学部考古学研究室『タチバナ遺跡（2）』研究活動報告7熊本大学文学部考古学研究室

斎藤毅・塚田公彦・山内秀夫　編著『トカラ列島　その自然と文化』古今書院

:「吐噶喇列島に関する地域認識の発展」「自然環境の特性」「伝統的生活様式の漸移性」「生活様式の変容」「結語」

斎藤毅「トカラ列島学術調査の思い出」『地理』25－4古今書院

下野敏見「南西諸島昔話の特色」『隼人文化』7隼人文化研究会

下野敏見『南九州の民俗芸能』未来社

下野敏見『南西諸島の民俗Ⅰ』法政大学出版局

下野敏見「昔話の伝承事情―南九州・薩南諸島―」『日本昔話通観』（鹿児島篇）25同朋舎出版

下野敏見「南西諸島の頭上運搬をめぐって」『鹿児島民具』創刊号

竹井恵美子「南西諸島の豆腐をめぐって」『農耕の技術』3農耕の技術研究会

野口武徳「田代安定」『南島研究の歳月　沖縄と民俗学との出会い』東海大学出版会

十島村教育委員会『十島村文化財調査報告書』2十島村役場

向山勝貞「奄美諸島の仮面行事」『人類科学』32九学連合

1981（昭和56）

伊藤幹治「中之島の祭祀とその社会的文脈」小口偉一教授古稀記念会　編『宗教と社会 小口偉一教授古稀記念論集』春秋社

十島村教育委員会　編『十島村文化財調査報告書』3十島村役場

南日本新聞社　編『トカラ　海と人と』誠文堂新光社

谷克彦『塩　いのちは海から』マルジュ社

下野敏見『南西諸島の民俗Ⅱ』法政大学出版局

中野卓『離島トカラに生きた男・第一部－流浪・開墾・神々－』御茶の水書房

鳥越皓之（文）・樋口健二（写真）『最後の丸木舟－海の文化史－』御茶の水書房

下野敏見「トカラ列島ネーシのイニシエーションと機能」『人文学科論集』鹿児島大学法文学部紀要17鹿児島大学法文学部

鳥越皓之「トカラ列島の焼畑農業技術についての覚書」『日本民俗学』133日本民俗学会

鳥越皓之「トカラ列島における門(カド)と一戸前一年階梯制村落にみる門の形態」『桃山学院大学社会学論集』14－2桃山学院大学社会学会

岡谷公二『島の精神誌』思索社

1982（昭和57）

大塚柳太郎・口蔵幸雄・「自給を目的とする漁活動の生態学的機能」九学会連合奄美調査委員会　編『奄美－自然・文化・社会』弘文堂

十島村教育委員会　編『十島村文化財調査報告書』4十島村役場

甲元真之「トカラ列島の文化」加藤晋平・小林達雄・藤本強　編『縄文文化の研究』6続縄文・南島文化　雄山閣出版

鳥越皓之『トカラ列島社会の研究－年齢階梯制と土地制度－』御茶の水書房

:「焼畑の土地制度と村落構造」「共有地と地租改正」「土地制度の変遷と部落の確執」「過疎問題と住民の対応」「観光開発の課題と問題点」「門と一戸前」「ムラの祭祀とムラの移動」「日待講からみたムラの生活と社会構造」「漁業組織と漁業技術」「カツオブシ製作の技術」「焼畑農業技術」「年齢階梯制村落の構造論理」

中野卓『離島トカラに生きた男・第二部－霊界・覚醒・開拓－』御茶の水書房

十島村教育委員会　編『のびゆく十島村』

斎藤毅「吐噶喇列島および奄美大島の地理学的特性」九学会連合奄美調査委員会　編『奄美－自然・文化・社会』弘文堂

斎藤毅「奄美諸島・吐噶喇列島における伝統的製塩形態」九学会連合奄美調査委員会　編『奄美－自然・文化・社会』弘文堂

下野敏見「トカラの聖地と世界観」『日本民俗学』144日本民俗学会

下野敏見「トカラ・太陽の御子」『はるかなる海の道』採訪神々のふる里1沖縄・奄美・トカラ　小学館

下野敏見「物質文化に見る南島基層文化の特色」『南島－その歴史と文化－』4第一書房

下野敏見「南日本のカミの出現」『まつりと芸能の研究』1まつり同好会20周年記念刊行会

下野敏見「海賊与助」『鹿児島県風土記』トラベル・メイツ社

島越皓之「耕地共有村落の地租改正－トカラ列島の事例」安藤精一先生還暦記念論文集出版会　編『地方史研究の諸視角』国書刊行会

中野卓・鳥越皓之「土地制度の変遷と村落の確執－トカラ列島中之島の場合－」九学会連合奄美調査委員会　編『奄美－自然・文化・社会』弘文堂

白木原和美「ツボゴの壺－吐噶喇における祭祀形態の資源とその変遷－」『文学部論叢』9熊本大学文学会

五代秀堯・橋口兼柄　編『三国名勝図絵　第二巻』青潮社

向山勝貞「奄美諸島の仮面行事」九学会連合奄美調査委員会　編『奄美－自然・文化・社会』弘文堂

村田熙「悪石島の日待に関する資料と解説」『鹿児島民俗』75鹿児島民俗学会

安田宗生「トカラ列島の農耕儀礼－悪石島の事例を中心として」『文学部論叢』4熊本大学

文学会

1983（昭和58）

稲垣尚友『棄民列島　吐火羅人国伝』未来社

稲垣尚友『山羊と芋酎－ナオトミのトカラ－』未来社

川寄兼孝「口之島の「立証名寄帳写」について 」西南地域史研究会　編『西南地域史研究』5文献出版

下野敏見「建築儀礼の特色と問題点」『日本民俗学』150日本民俗学会

下野敏見「ナマハゲが薩南諸島の島々に存在している」『博学紀行－鹿児島県』福武書店

下野敏見「トカラのテラ墓」『隼人文化』13隼人文化研究会

下野敏見「宝島の火の神祝詞」説話・伝承学会　編『説話伝承の日本・アジア・世界』桜風社

白木原和美「トカラ列島への誘い」『えとのす』21新日本教育図書株式会社

川崎晃稔「薩南諸島の磯漁」『鹿児島民具』3鹿児島民具学会

田畑久夫・紀禎哉・寺本陽子「近代以降の吐噶喇列島における村落構造の変貌－宝島を事例として－」『歴史地理学紀要』25歴史地理学会

藤原明衡著・川口久雄訳『新猿楽記』平凡社

1984（昭和59）

稲垣尚友「吐噶喇に生きた常ジィの思い出」團伊玖磨　監修『沖縄・薩南の島々』にっぽん島の旅5中央公論社

鵜飼照喜「「トカラ列島社会の研究」鳥越皓之著」『社会学評論』35－1 日本社会学会

下野敏見「ヤマト・琉球を吹きぬける南西諸島の風」『季刊　自然と文化』春季号　日本ナショナルトラスト

下野敏見「南西諸島の民俗芸能」團伊玖磨　監修『沖縄・薩南の島々』にっぽん島の旅5中央公論社

下野敏見『カミとシャーマンと芸能』八重岳書房

:「原始のカミの出現」「風土と祭りと芸能」

下野敏見『トビウオ招き－にっぽん文化を薩南諸島に探る－』八重岳書房

:「ヤマト・琉球を吹きぬける南西諸島の風」「薩南諸島に出没する仮面来訪神」「近世風流の伝承地帯を行く」「ヤマトの民具と琉球の民具」「トビウオ招きとエビス神」「太陽の御子・ネーシの誕生」「サンゴ礁の島の風葬墓地」「古風なトカラ盆踊り」「トカラ列島の民俗文化の特色を探る」

1985（昭和60）

木村大治「「トカラ列島社会の研究－年齢階梯制と土地制度」鳥越皓之著」『季刊人類学』

16－1 京都大学人類学研究会
小野重朗『民具の伝承　有形文化の系譜（下）』慶友社
紙谷敦之「七島郡司考－明清交替と琉球支配－」『南島史学』25・26 南島史学会
白木原和美「南島ニ題－古墳文化に関連して－」論集日本原史刊行会　編『論集日本原史』吉川弘文館
末吉寛季『宝島歴史散歩(第一集)』
水野修『七島灘を越えて』海風社
向山勝貞「南海の仮面来訪神」『蒼海訪神　うみ』日本人の原風景 2 旺文社

1986（昭和 61）
大井徳三「巨大魚の飛ぶ海－鹿児島・ダツ漁の島－」NHK 社会教養部『ぐるっと海道 3 万キロ』取材班　編　『ぐるっと海道 3 万キロ』1 沖縄九州編　飛鳥新社
下野敏見『ヤマト文化と琉球文化－南の島々の生活行事に映った日本文化の古層地図－』PHP 研究所
下野敏見「奄美・吐噶喇の高倉」「吐噶喇列島のオモゲー」「琉球ヘラ」『技術と民俗』下　都市・町・村の生活技術誌　日本民俗文化大系 14 小学館
中山清美「トカラと奄美」『せあらとみ－琉球の歴史と文化－』2「せあらとみ」同人

1987（昭和 62）
大胡修「宝島の祭祀組織の構造と変化－神役組織を中心として－」『社会人類学からみた日本』蒲生正男教授追悼論文集　河出書房新社
木村大治「小集団社会における「集まり」の構成－トカラ列島の事例」『季刊人類学』18－2 京都大学人類学研究会
小野重朗「稲作正月と七島正月」『隼人文化』19 隼人文化研究会
川崎史人「シャーマンと神・祖霊－トカラ列島のネーシの場合－」木曜会　編『民俗宗教』1 創樹社
川崎史人「トカラ列島の祭祀組織とトンチ－悪石島の事例を中心にして－」『明治大学社会・人類学年報』1
下野敏見「トカラ列島の聖地と神々」谷川健一　編『日本の神々－神社と聖地－』13 南西諸島　白水社

1988（昭和 63）
琉球王国評定所文書編集委員会『琉球王国評定所文書』全十九巻（1988～200）浦添市教育委員会

1989（昭和 64・平成元）
十島村教育委員会『トカラだより　人と島々　山海留学』

湖中真哉「平等主義社会の「利得と代価」－トカラ列島 K 島の事例」『日本民俗学』179 日本民俗学会
下野敏見『ヤマト・琉球民俗の比較研究』法政大学出版局
谷川健一　編『巫女の世界』日本民俗文化資料集成６　三一書房
中盾興　編『日本における海洋民の総合研究－糸満系漁民を中心として－』下巻　九州大学出版局
向山勝貞「南九州の草木神」『季刊　自然と文化』26 草荘神　日本ナショナルトラスト
安田宗生「悪石島の漁撈伝承」『文学部論叢』28 熊本大学文学会

1990（平成 2）
十島村教育委員会『ふるさと十島』
石井忠『漂流物事典－海からのメッセージ－』朝日新聞社
大林太良「合流と境界の隼人世界の島々」『隼人世界の島々』海と列島文化５小学館
小野重朗「南九州と薩南諸島の農耕儀礼」『隼人世界の島々』海と列島文化５小学館
上村俊雄「南九州の考古学」『隼人世界の島々』海と列島文化５小学館
川崎晃稔「海亀の民俗」『隼人世界の島々』海と列島文化５小学館
紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』校倉書房
下野敏見「トカラ列島の民俗文化」『隼人世界の島々』海と列島文化５小学館
高谷紀夫「南西諸島の社会史－九州よりトカラ列島まで－」『隼人世界の島々』海と列島文化５小学館
向山勝貞「仮面と神々」『隼人世界の島々』海と列島文化５小学館

1991（平成 3）
稲垣尚友『青春放蕩』福音館書店
大胡欽一「悪石島予備調査報告Ⅱ－鹿児島県十島村悪石島－」『野帳』５明治大学政経学部社会学研究室
鹿児島民具学会　編『かごしまの民具　鹿児島民具博物誌』慶友社
川崎晃稔『日本丸木舟の研究』法政大学出版局
豊田謙二『薩摩焼酎紀行　民の生活と文化』高木書房出版
藤沢高治『南島周遊誌』昌文社
宮山清『黒潮の譜　戦時中の十島記』
本木修次『離島めぐり 15 万キロ』古今書院

1992（平成 4）
大胡修ゼミナール「悪石島予備調査報告Ⅲ－鹿児島県十島村悪石島の記録－」『野帳』６明治大学政経学部社会学研究室

瀬尾央『吐噶喇　トカラの遠い空から』山と渓谷社
小野重朗（文）・鶴添泰蔵（写真）『鹿児島の民俗暦』海鳥ブックス 13　海鳥社
石井忠『海辺の民俗学』新潮社
川崎史人「対比と収斂の世界観－トカラ列島悪石島におけるトンチとヒガシをめぐって－」『南島史学』39 南島史学会
小園公雄「薩摩国十島村（口之島・中之島）の中世城砦と倭寇について」『隼人文化』24・25 隼人文化研究
下野敏見『フォークロア南九州－基層文化の探究－』丸山学芸図書
白木原和美「琉球弧の考古学－奄美と沖縄諸島を中心に－」『琉球弧の世界』〈海と列島文化〉 6 小学館
谷川健一「「古琉球」以前の世界－南島の風土と生活文化－」『琉球弧の世界』〈海と列島文化〉 6 小学館
萩尾俊章「沖縄における神酒と泡盛の諸相」『沖縄県立博物館紀要』18 沖縄県立博物館
久永元利『石敢當探訪・第三集－大隈諸島・吐噶喇列島編－』雪屋書房

1993（平成 5）

安渓貴子「トカラ列島中之島のサトイモ類の外部形態と染色体数」『沖縄生物学会誌』31 沖縄生物学会
石井忠「海からのメッセージ・漂着物」『漂流と漂着・総索引』海と列島文化別巻　小学館
大胡修ゼミナール「平島調査報告Ⅰ－鹿児島県十島村平島－」『野帳』7 明治大学政経学部社会学研究室
尾竹俊亮『幻の琉球－トカラ列島－』まろうど社
喜舎場一隆『近世薩琉関係史の研究』国書刊行会
小田雄三「嘉元四年千竈時家処分状について－得宗・得宗被官・南島諸島－」『年報中世史研究』
木部暢子「トカラ列島宝島の中舌母音」『国語国文 薩摩路』37 鹿児島大学法文学部国文学研究室
榮喜久元『道之島紀行』丸山学芸図書
中村明蔵『隼人の研究』丸山学芸図書
フォルカード著　中島昭子・小川小百合訳『幕末日仏交流記　フォルカード神父の琉球日記』中央公論社
外間守善・下野敏見「対談：沖縄の装身文化を考える」『化粧文化』28 沖縄の美　ポーラ文化研究所
本木修次『離島めぐり 15 万キロ』Ⅱ古今書院

1994（平成 6）

東喜望「笹森儀助－その生涯と事績－」『季刊　自然と文化』46 日本ナショナルトラスト
大胡修「伝統的社会の構造的特質とその変化－トカラ・宝島の事例研究－」穴田義孝・大胡修・加藤隆・大胡欽一共著『南島民俗文化の総合研究』人間の科学社
大胡修「トカラ社会の年中行事－鹿児島県十島村宝島の事例－」『政経論叢』62－2・3 明治大学政治経済研究所
小川亥三郎「小宝島の古名・島子について」『鹿児島民俗』105
菊池保夫「十島村の沖縄戦」『奄美郷土研究会報』34
熊本大学考古学研究室　編　『トカラ列島の考古学的調査』十島村埋蔵文化財調査報告 1 十島村教育委員会
熊本大学文学部考古学研究室『宝島大池遺跡』熊本大学文学部考古学研究室研究報告 1
熊本大学文学部考古学研究室『諏訪之瀬島切石遺跡』熊本大学文学部考古学研究室研究報告 1
下野敏見『トカラ列島民俗誌』第一書房
:「トカラ列島概観」「悪石島の民俗」「平島の民俗」

1995（平成 7）
稲垣尚友『十七年目のトカラ・平島』梟社
宝島大池遺跡発掘調査班「吐喝喇列島宝島大池遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』60 国立歴史民俗博物館
十島村誌編集委員会　編『十島村誌』十島村
十島村役場　編『吐噶喇』チクマ離島シリーズ　チクマ秀版社
下野敏見「琉球文化圏の墓制と祖霊祭」『日本研究』12 国際日本文化研究センター紀要
下野敏見「講演・民家と民俗神」『民俗建築』108
下野敏見「もう一つの餅なし正月－芋作から稲作へ－」『フォークロア』6
渡山恵子「ネーシ（巫女）の祓から近代医療の受容過程について－悪石島における聞き取り調査－」『隼人文化』27・28 隼人文化研究会
宮田登「民俗宗教と「女の力」」『仏教』30

1996（平成 8）
安渓貴子「サトイモのきた道－西表・トカラ・屋久島の調査から」『ヒト・モノ・コトバの人類学』國分直一博士米寿記念論文集　慶友社
稲垣尚友『密林のなかの書斎－琉球弧北端の島の日常－』梟社
大木隆志「シリ-ズ旅の記憶(79)火山の飛び石・サンゴ礁の飛び石－トカラ列島・小宝島の 1 日」『地理』41－10 古今書院
木下尚子『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版局
小島摩文「シャーマンの儀礼的女性化について－悪石島の S さんの思い出－」『比較民俗

学会報』16－2 比較民俗学会
下野敏見「巫女舞いの伝統－特に内侍舞いについて－」『日本民俗学』207 日本民俗学会
下野敏見「日本の火の神信仰－特に南西諸島を中心として－」山折哲雄　編『日本文化の深層と沖縄』国際日本文化研究センター
下野敏見「トカラは琉球かヤマトか」『ヒト・モノ・コトバの人類学』國分直一博士米寿記念論文集　慶友社
中村明蔵『ハヤト・南島共和国』〈鹿児島文庫 29〉春苑堂出版
村田熙「種子・屋久・トカラ列島の山岳信仰」『南九州の庶民生活』村田熙選集 3 第一書房
村田熙「悪石島の日待に関する資料と解説」『南九州の庶民生活』村田熙選集 3 第一書房
村田熙「悪石島の盆踊とボゼ」『南九州・薩南諸島の芸能』村田熙選集 4 第一書房

1997（平成 9）
池宮正治「歴史と説話の間―語られる歴史―」琉球王国評定所文書編集委員会　編『琉球王国評定所文書』第十三巻　浦添市教育委員会
紙屋敦之『大君外交と東アジア』吉川弘文館
小島摩文「トカラ列島と奄美群島における「地域開発と民俗変化」」『日本民俗学』210 日本民俗学会
永山修一「古代・中世における薩摩・南島間の交流―夜久貝の道と十二島」村井章介・佐藤信・吉田信之　編『境界の日本史』山川出版社
宝島大池遺跡発掘調査班「トカラ列島宝島大池遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』70 国立歴史民俗博物館
村井章介「中世国家の境界の琉球・蝦夷」村井章介・佐藤信・吉田信之　編『境界の日本史』山川出版社
山崎義人・後藤春彦・村上佳代「島民生活の体系的把握による小宝島の生活環境に関する考察－離島の人口定着と地域維持に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』500 日本建築学会

1998（平成 10）
毛利甚八「鹿児島県トカラ列島宝島 1996 年 9 月と 10 月の旅」『宮本常一を歩く』下巻　小学館
尾口義男「薩摩藩の人口」『黎明館調査研究報告第』11 鹿児島県歴史資料センター黎明館
紙屋敦之「薩摩の琉球侵入」『新琉球史　近世編（上）』琉球新報社
ヨーゼフ　クライナー「記念講演　トカラの海からみた日本文化」『国際海洋シンポジウム「海は人類を救えるか」（1997 版）』日本財団
本木修次『小さい分校めぐり』ハート出版
向一陽「にっぽん島の頂で 21　中之島(トカラ列島)・御岳」『山と渓谷』755 山と渓谷社

1999（平成 11）

阿満晋「理想郷をさがす旅 5　『黄島・悪石島幻視行』」『しま』45－2 日本離島センター

龍田考古会　編『南西諸島の先史時代』白木原和美南島関連論文　龍田考古会

福満寿雄「住めば都の島暮らし」『新聞研究』581

山里純一『古代日本と南島の交流』吉川弘文館

和田久徳・高瀬恭子・内田晶子・真喜志瑶子「李朝実録の琉球国史料（訳注）（二）」『南島史学』37 南島史学会

2000（平成 12）

上西重行『夢から来た景色』ボーダインク

岡谷公二『南の精神誌』新潮社

木部暢子『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版

尾口義男「薩摩藩と近世琉球国の人口－琉球人口データ及び近世前期の薩摩藩の社会動向に関する新たな史実を付加しての「薩摩藩の人口」補論－」『黎明館調査研究報告』13 鹿児島県歴史資料センター黎明館

竹村嘉晃「トカラ列島口之島の霜月祭り－1999 年度のフィールドワーク報告」『ムーサ』1

豊見山和行「冠船貿易からみた琉球王国末期の対清外交」『日本東洋文化論集』6 琉球大学法文学部紀要

宮下章『鰹節』ものと人間の文化史 97 法政大学出版局

2001（平成 13）

日高恒太朗『島の食事―種子島・屋久島・吐噶喇紀行―』透土社

茶圓正明・市川洋『黒潮』（かごしま文庫 71）春苑堂出版

上原兼善『幕藩制形成期の琉球支配』吉川弘文館

川野和昭「もう一つの焼畑－南九州と東南アジアの竹の焼畑－」赤坂憲雄　編『東北学』＜南北論の視座＞4 東北芸術工科大学東北文化研究センター

佐々木真紀子「「ゴセンゾサマの正月」における女性の役割－トカラ列島悪石島の事例より」『政治学研究論集』15 明治大学大学院

鈴木勇次「トカラ臥蛇島へのバック・トゥー実現－臥蛇島離島三〇周年記念として旧住民海を渡る」『しま』47－2 日本離島センター

出口昌子『丸木舟』ものと人間の文化史 98 法政大学出版局

下野敏見「民具から見た列島の文化史」赤坂憲雄　編『東北学』＜南北論の視座＞4 東北芸術工科大学東北文化研究センター

清水哲男『吐噶喇へ　都会の夢・島の夢』再海社

2002（平成 14）

稲垣尚友「サチバアの先祖祭り－平島の女たち－」赤坂憲雄　編『東北学』＜海と鳥の民族史＞5東北芸術工科大学東北文化研究センター

今村治華「トカラ列島北上旅日記」『ラメール』27－3 日本海事広報協会

NHK出版　編『データマップ日本－日本経済再生への処方箋－』＜NHKスペシャルドキュメント＞

東喜望『笹森義助の軌跡　辺境からの告発』法政大学出版社

川野和昭「『海上の道』再考－南九州・奄美諸島とラオス・タイのアカ族の稲種・稲魂継承儀礼の比較から－」赤坂憲雄　編『東北学』＜海と鳥の民族史＞5東北芸術工科大学東北文化研究センター

田畑千秋「トカラ列島の言語事情－諏訪之瀬島に残る奄美方言」『国文学解釈と鑑賞』67－1　至文堂

出口昌子「丸木舟の世界－列島と周辺アジア－」赤坂憲雄　編『東北学』＜海と鳥の民族史＞5東北芸術工科大学東北文化研究センター

徳永和喜「トカラ列島、その海洋文化」　赤坂憲雄　編『東北学』＜〈南〉の精神史＞6東北芸術工科大学東北文化研究センター

下野敏見「名越左源太著「南島雑話」を読んで（下）」「鹿児島民俗」編集委員会　編『鹿児島民俗』121　鹿児島民俗学会

渡山恵子「ネーシ（内侍）の継承と成巫過程－悪石島の場合－」「鹿児島民俗」編集委員会　編　『鹿児島民俗』121　鹿児島民俗学会

野元尚巳『黒潮海道を行く　沖縄～鹿児島カヤック 1000 キロ』葦書房

真栄平房昭「トカラ海域史の視点―海上交通と異国船来航をめぐって―」　赤坂憲雄　編『東北学』＜海と鳥の民族史＞5東北芸術工科大学東北文化研究センター

松下志朗・下野敏見　編『街道の日本史 55　鹿児島の湊と薩南諸島』吉川弘文館

2003（平成 15）

今村治華『島を旅する』南方出版社

今村治華「小宝島」『別冊太陽　日本の島』平凡社

奥野一生『日本の離島と高速船交通』竹林館

川野和昭「「海上の道」と南九州および南西諸島の民俗－七島正月とショチョガマと－」赤坂憲雄・中村生雄・原田信男・三浦佑之　編　『人とモノと道と』いくつもの日本3岩波書房

佐竹京子『軍政下の奄美の密航・密貿易』南方新社

外川健一「離島の廃棄物リサイクル事情 12　離島のなかの離島!?－鹿児島県トカラ列島の廃棄物事情(1)」『Indust』17－6 全国産業廃棄物連合会

外川健一「離島の廃棄物リサイクル事情 13　離島のなかの離島!?－鹿児島県トカラ列島の

廃棄物事情(2)諏訪之瀬を訪ねて」『Indust』17－7全国産業廃棄物連合会
外川健一「離島の廃棄物リサイクル事情14　離島のなかの離島!?－鹿児島県トカラ列島の廃棄物事情(3)中之島・悪石島を訪ねて」『Indust』17－8 全国産業廃棄物連合会
西岡拓二「島にくりこまれた暮らし」＜島に渡る5＞『九州のムラ』12九州のムラ出版室
高江洲昌哉「1870,80年代の鹿児島県下の島嶼を巡る行財政史的考察」『沖縄文化研究』29沖縄文化研究会
徳永和喜「文政7年宝島江異国人到来事件『黎明館調査研究報告』16 鹿児島県歴史資料センター黎明館
豊見山和行　編『日本の時代史18　琉球・沖縄の世界』吉川弘文館
平凡社　編『別冊太陽』日本のこころ125＜日本の探検者たち＞　平凡社
向山勝貞「南西諸島の仮面行事－特に竹ヒゴ製の仮面について－」『世界に拓く沖縄研究』第4回「沖縄研究国際シンポジウム」ヨーロッパ大会　第4回「沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会

『十島村誌』を読む

島嶼と奄美史を理解するために

○●1

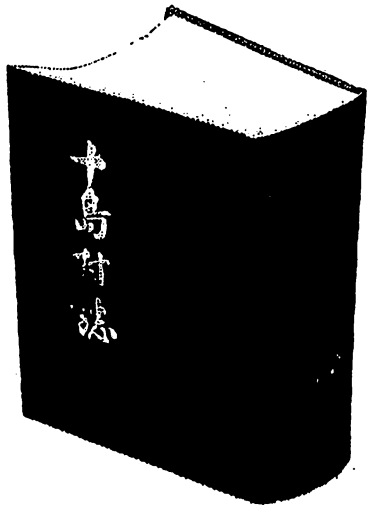
己政削号

各島の個性を重視

困難乗り越えて編集

薩摩・奄美間の島嶼群

鹿児島と奄美の間には、現在の行政区の区分でいえば、上三島ともよばれる竹島・硫黄島（鬼界ケ島）・黒島の鹿児島郡三島村が一グループとしてある。ついで西之表市と熊毛郡に属している種子島・西之表市行政区の馬毛島・屋久島・上屋久町に含まれる口永良部島の島嶼（しょ）がある。そして鹿児島郡十島村（としま村）がある。この島嶼群は、下七島（しもひちとう）・トカラ列島ともよばれているが、北から口之島・臥蛇島（がじゃじま）・小臥蛇島・中之島・平島（たいらじま）・諏訪之瀬島（すわのせじま）・悪石島・小宝島・宝島・上根島・横当島の十一からなる。そのうち、臥蛇島・上根島・横当島の四島は無人島である。このように島を押さえてみると、奄美・鹿児島の海上にはふつう十八の島嶼がある。



6年の歳月をかけた大著『十島村誌』

これらの島嶼群のうち、現在の行政区分としての十島村から『十島村誌（としまそんし）』が六年間の歳月をへて一九九五年三月に発行された。目次は、第一編概観として自然環境、社会環境。第二編歴史は先史時代のトカラ、中世のトカラ、近世のトカラ、近・現代のトカラ。第三編民俗文化には島別民俗概観、項目別民俗誌。第四編行政として十島の政治、村民の生活、観光、産業・経済、厚生、教育船舶のあゆみ――があり、最後に十島村誌略年表がついている。

行政区越えた〈読み〉を

この『十島村誌』を我々はどう読むか、ということが念頭におかれなくてはならない。いくつか考えられよう。

①各島嶼の個性を読むことが挙げられる。この書がそうした側面を重視して各編を記述しているために可能である。もともと十一の島から成り立つため、それぞれの「島誌」も可能である。それゆえ各島を一冊にまとめるには困難を伴うが、それを実現させている。この書が全千七百五十八ページに及ぶ膨大なものになった理由も理解できる。

②現在の行政区概念の地域誌を取り払うこと。なぜならこれら島嶼群が、鹿児島から沖縄までの島嶼群の一構成部分であるからだ。島嶼群における人・物の移動や歴史事象は現在の行政区を越えるのである。また、行政も歴史的に変転している。近代を例にとると、一八八五年（明治十八年）に行政官庁は奄美の大島支庁であった。下七島は大島支庁に、上三島は大島支庁種子島出張所の管轄である。一九〇八年（明治四十一年）には、下七島・上三島が大島郡十島村（じっとうそん）となる。一九四六年（昭和二十一年）下七島は奄美と同じく米軍支配下の臨時北部南西諸島政府、奄美群島政府の管轄地域で、上三島は鹿児島県行政下となる。そして一九五二年（昭和二十七年）、下七島は奄美より一年早く「復帰」する。したがって、この地域を現在の行政概念の一地方誌と捉えるには無理がある。下野敏見氏が「監修及び編集にあたって」でこの地域を北と南の狭間の島と指摘しているのは、一つにはそのことを指しているのである。

③奄美・沖縄の理解、とりわけ奄美史の理解や視野を広げる。率直に言えば、微かに、いやほとんど視野に入れていないこの地域への理解が、我々奄美の人々の奄美に対する歴史認識・意識を前進させることにもなるのである。

私は『十島村誌』を、ここでは②、③の立場を中心に近世と近現代史の面から読んでみたい。

（奄美郷土研究会会員）

（十島村誌編集委員会編・十島村発行☎0992②2-01、頒価三千円）

南海日日新聞　平成７（1995）年12月24日

『十島村誌』を読む

島嶼と奄美史を理解するために

○●2

弓削　政己

島嶼間の拝借米

究明に必要な史料

『十島村誌』の近世は、ほとんど『鹿児島県史』、「十島村文化財調査報告書」（第二集）（一九八〇年八月、十島村教育委員会）、『藩法集8　鹿児島藩』（上下）からの史料提示で構成されている。この研究は、奄美、琉球史を含めた島嶼（しょ）群の一構成地域という点で、島嶼一般への薩摩藩の政策を理解させるものとなっている。

遭難時の拝借米

その一つに、船の遭難時の拝借米の決裁の仕方が、琉球・奄美だけでなく、カラも含め、島嶼全体として薩摩は組織された規定を持っていることが理解できる。

『十島村誌』には未記載史料であるが、「十島村文化財調査報告書」（第二集）の「中之島年貢帳」に、一八四一年（天保十二）五月三日、中之島屋久瀬へ、船主、琉球勝連間切の比嘉村平良之親雇上の七反帆馬艜船一艘（そう）が漂着した事例がある。

四月十五日、宮古島の貢米搬送のための「宮古島御米漕」として琉球那覇川を出帆し、漂着している。その際、船頭の「加まと吉元」名で、真米一石二斗六升二合を船中拝借米として、中之島の「用心米」の中から借り、その借りた分だけ、藩から補塡（てん）されている。

『琉球館文書』の一七九二年（寛政四年）の文書によると、拝借した琉球の人々は鹿児島の琉球館に返却する規定になっている。

大島から琉球に漂着して拝借した場合は、帰島後に、大島の「大島蔵」へ返済することになっている。

このことからすると、島嶼間で漂着した民間の人々は、漂着地で拝借米をすると、文字どおりその分だけ返済することになっている。もちいきりではないことがわかる。属する島に帰すことになっている。そこから薩摩が返済の決裁をしているのであろう。

琉球内部においては、『多良間文書』によると、宮古島人が多良間に漂着し米を拝借したら、宮古蔵へ返済する仕組みである。

その後返済分として受け取った役所と質し出した所との返済関係はどうなっているのか。薩摩、琉球王府間の決裁について前述の『琉球館文書』をみると、琉球での薩摩や大島の人々の拝借米は、以前は琉球が薩摩へ送る上納米と相殺する規定であった。一七七二年（安永元年）、この制度は止めて、鹿児島の琉球館へ直接返済させるという琉球と当事者間の決裁で、薩摩に決裁の煩わしさや損害を与えないという規定に変更されている。ところがそれでは、実際に返済されず琉球としても困るので、もとのように上納米との相殺を一七九二年（寛政四年）に要求している、（拙稿「奄美から視た薩摩支配下の島嶼群」、「新沖縄文学」81号）

決裁は役所間で

以上のことから、琉球・奄美だけでなく、『十島村誌』とその典拠史料を見ると、鹿児島以南の島嶼の漂着での拝借米については、以下のように書ける。

①島嶼間での漂着時には、漂着の人々から拝借米の申し出があれば、その地の役所から質し出す。

②返済は漂着民属地の島の役所へする。

③役所は藩、鹿児島の琉球館、あるいは中之島や大島、宮古、多良間その他にある。具体的返済の方法は変遷を得るが、それらの役所間で決裁される仕組みである。この仕組みのうち、天草の漂着民が食料拝借の返済で、帰国時に代銭で返す約束をしているところをみると、他藩との関係も同様であることを物語っている。また、各島の飢饉時の救米についても同様であることが推察される。

こうしたことから『十島村誌』は、難船対応も含め、その究明に大きな役割を果たすであろう。

（奄美郷土研究会会員）

南海日日新聞　平成7（1995）年12月25日

『十島村誌』を読む

島嶼と奄美史を理解するために

○●3

弓削　政己

通手形研究に重要

代米制度は検討課題

異なる支配形態

トカラや奄美、琉球の三地域は、薩摩藩の支配としては異なった形態をとっている。

紙屋敦之氏によれば、薩摩は琉球支配、奄美の直接支配を潜国に隠すために虚構の国トカラを創出し、薩摩を後影に置く統治体制をとったという。しかし、実態はそうではなかった。各島々の人々は前回指摘したように地域枠を越えて移動した。従って、藩は各島嶼（しょ）の支配機構を確立のうえ、実情に即した規定を定めている。

トカラでは、船奉行のもと口之島、中之島、宝島に在番奉行を、各島に郡司・横目・浦役・名頭を置いた。郡司は各島の報告を在番奉行や御船手にしている。遭難船については御船手などに直接裁可を仰いでいる。それとともに琉球漂着船や拝借米などについて琉球在番へ報告している。

また、郡司、奄美の代官、琉球在番間で島嶼間の連絡を取り合いながら、それぞれ鹿児島の藩の所轄役人に報告している。

トカラの通手形

「十島村文化財調査報告書（第二集）」の一部を載せた『十島村誌』には、「差出」と記載されている多くの「通手形」がある。これらの通手形は、薩摩も含め奄美・琉球全域に共通して通用しているもので、抜荷防止、キリスト教対策などを目的にしている。記載事項は、船の種類と大きさ、乗組員年齢・集落名・人名を記載し、宗教を明記し、積み込んだ荷物を列記。その上で行く先と目的を記載し、禁制品不所持を述べている。（拙稿「近世奄美の通手形」、鹿児島経済大学「地域総合研究」第22巻第1号、一九九四年）

この通手形が「明治三年庚午七月ヨリ　津口通留帳　中之島郡司」には六点ある。船頭から中之島郡司へ願い出て、郡司の保証を受けて、山川津口諸所船御改所へあてている。トカラと薩摩の通手形は、奄美・琉球と比較して、乗組人数のみ記載し、人名は列記していない点で異なっている。このことがトカラの通手形記載様式で明確になった。

通手形が他に十点、計十六点ある。これまで知られている坊津、屋久島、奄美、琉球の十七点とほぼ同じ数がトカラにある。今後の通手形研究に大きな進展をもたらすだろう。

代米に琉米使う

藩は中之島の飢饉のため、拝借米として真米、琉米をあてている。中之島は真米、琉米、代銀で少しずつ返済している。一八四一年（天保十二年）、一八五二年（嘉永五年）の記録がある。中之島には藩からの拝借米や、逆に返済米としての琉米がある。この琉米はどういうルートで流入してきたのだろうか。

トカラの近世期の貢租は、鰹節・煎真綿、硫黄島では硫黄・織木綿・真竹であった（五三七ページ）。宝島は年貢上納やその浦納分を代銀で納めることも認められていた（六五〇ページ）。この上納物に対して、屋久島や奄美同様、代米制度があったのではないかと考えられる。屋久島では屋久杉の平木が年貢上納物としてあり、また奄美では、十七世紀後半から砂糖上納が始まった。これに対する代米が藩からもたらされるが、藩は各島嶼の組み合わせによっても対応していた。奄美・屋久島に対しては、藩米とともに琉球国頭地方の赤米を砂糖や平木の代米として搬入させていた。理由は、赤米は大阪市場で価格が低いからである。この仕組みはトカラにも適用されたのではないか。検討課題である。

（奄美郷土研究会会員）

南海日日新聞　平成7（1995）年12月26日

『十島村誌』を読む

島嶼と奄美史を理解するために

○●4

己政削号

島嶼交流と行政

一回目でも述べたが、地方誌づくりが現在の行政区画という枠内で捉えられるために、しばしばその地域だけの把握にとどまる弊に陥りやすい。ところが『十島村誌』をみると、十島村の存在そのものが奄美、琉球を含めた島嶼（しょ）交流関係ということで「行政内地方誌」を越えた問題を提起している。

『十島村誌』（七一八ページ）によれば、小宝島は盛んに交易し、現在でも与名瀬に干魚・ひろうの類を売り、日用品を購入している。宝島は藩政時代から大島へ渡航したし、一八四二年（天保十三年）以前には、砂糖製法も許可されている。それ以前も同様か不明だが、近代には砂糖、牛、屋久貝を売り、生活物資を購入している。広く知られているように諏訪之瀬島には笠利から多くの人たちが移住している。また奄美では、与論島、沖永良部島が藩政期から琉球国頭とい。

行政越え問題提起

問屋制度は研究必要

このように私は島民の主体的動きに注目しているが、島嶼民が統治の枠を越えて動くのは何故か、ということを課題としておきたい。

「問屋」について

次に、奄美研究の前進のために『十島村誌』の示す役割について触れてみたい。

奄美では藩政下、島出身の役人（島役人）が藩の慶賀などで鹿児島に上国する際、宿泊する。これらの宿は「問屋」と呼ばれていて屋であるとともに仲買・卸売もやっていたが、だんだん名前だけになり、中には旅館業や荷物預かり所になった。

旭通の三原嘉三次の口之島問屋が鹿児島にある。問屋仲介で島の物産を販売し、生活物資を得る。鹿児島の泉屋町の森田平八の中之島問屋。汐見町の永野助次郎の臥蛇島の問屋。問屋が不明だが、枕崎には土釜喜之助・中村長八がいた。鹿児島上町の白貝川蘇助の平島問屋。悪石島問屋は鹿児島の田辺治平衛と天島の酒匂熊助のがある。宝島は大島の山下店や松枝分店である。

こうしてみると、問屋は制度として確立しており、奄美関係特有のものでないことが分かる。『十島村誌』には問屋の氏名が載っているので、追跡調査をすればその具体的像が分かるかもしれない、という期待がもたれる。

（奄美郷土研究会会員）

各島ごとに定まった問屋があり、大島問屋・徳之島問屋・喜界島問屋・沖永良部島問屋（与論を含む）という名称があった。奄美研究では、藩政時代から近代にかけての一貫した問屋制度の研究が必要である。これまで問屋については「宿泊」（『鹿児島大百科事典』七四七ページ）と指摘されている。また、本富（ほんぶ）安四郎「薩摩見聞記」には「盞（けた）し維新前に在りては外城より城下に出る賭人の旅宿は総てこれを問屋と称し、一外城に必ず一軒の定宿あり。その郷々より扶持米等を給して保護を為し、其郷中より来る人は皆之に宿泊せり」とある。

十島の問屋は、笹森儀助『拾島状況録』にその商人名が記載されている。各島関係の問屋は次のようである。

南海日日新聞　平成7（1995）年12月27日

『十島村誌』を読む

島嶼と奄美史を理解するために

○●5

弓削　政己

土地制度の研究

奄美の課題も提示

「島次飛船」とは

奄美の文書でしばしば「島次飛船」「直乗飛船」という用語が使われている。これまでその意味と呼称が私には不明であった。「しまつぎひせん」「ちよくじようひせん」と読むのか不明だが、『十島村誌』とその典拠とする「十島村文化財調査報告書（第二集）」によって、意味が理解できる。

「中之島年貢帳」の「嶋次飛船差出物付弐通」によれば、「一、弐枚帆四艘一、船頭水手三拾弐人　右者御国元より七島郡司・横目へ被仰渡之御用封、島次を以臥蛇島より次来たり申候二付、当嶋より飛船取仕立、悪石嶋へ次渡申候。寅四月二日より同五日迄往来日数四日、壱日二船壱艘水手八人ツヽ。船頭中之島之小牧熊助」とある。これは藩より七島の役人の郡司と横目への達文を届ける御用である。「島次」で臥蛇島（がじゃじま）より次渡ってきた。当島（中之島）よりも新たに「飛船」を準備し、悪石島へ次渡した。

一八四二年（天保十三年寅）四月二日より五日まで往復四日かかった。船は一日に一艘（そう）、船頭と水手で八人の割で、船四艘、水手三十二人である。

これによると「島次飛船」は、①御用で島から島を継いでいく早船である。ここでは臥蛇島から中之島、悪石島への島次での早船である。②船頭は同じ人物。③船は同じでなく、島ごとで新たな船を準備する。④水手（乗組員）も一艘ごとの計算である。とする。

土地制度の理解

各島に立ち寄る場合はあるが、同じ「船・船頭・水手」によって直接目的地まで行く公用の早船を意味する。このように理解できるのではないか。なお、「直乗飛船」で港へ行く事例については、山下文武「御国許直乗飛船萬日記」について（『南日本文化』第二十八号）参照。

例えば、奄美の文書に出てくる「島次飛船」は、奄美から藩へ御用の場合に、同じ船頭で藩への航路途中にある島を経由し、その島で新たな船を仕立て、水手も交代して藩へ行く公用のための早船のことと理解できる。「直乗飛船」はその反対で、途中、評価、地積、作目と収穫高、耕作者名が必ず記され」、門割制度が導入されたという。藩は数戸の農民を一つの門（かど）単位に組織し、門は藩に対して税として物納や賦役（ぶえき）がある。門は農民の長たる名頭（みようず）と数家部の名子（なこ）で一門を構成し、村は門数十門で構成される。藩はこの門に田畑を割り当て強制耕作させ、検地後や数年ごとに土地の割替えをしていた。これを門割制度といい、享保内検の十八世紀に完成したという。

奄美史研究で最も遅れている課題と言ってよいであろうテーマは、土地制度である。そのためにも『十島村誌』（七四二ページ）は貴重である。

トカラでも、享保内検と呼ばれる藩独自で検地をし、「田畑の所在を示す字名、上田・下田などの土地

しかし、十島村には、「不定畑割付」といって、共同での焼畑地を、地積を全く記載せずに収穫高で土地を評価し、各人にほぼ平等に土地配分して数年間の使用収益権を与え、所有権は島全体の共同体にあるという制度があった。そのため藩は享保内検で門割を導入したが、「結果的には焼畑農業下の地割制度を追認する形に終わり、一般的な門割とはかなり異なる内容となっている」（七四四ページ）という。では、奄美はどうなっているか。享保内検で地検帳は藩と同一であり、門割制度を導入しようとしたがなされなかった。税の門に対する割当でなく、十五歳以上六十歳未満の成年男子ごとの人頭に対して耕作地を割り当て、税を徴収しているという（松下志朗『近世奄美の支配と社会』）。

つまり、門割制度が貫徹されなかったのは奄美だけではなかったという理解が必要である。そして、このことは明治の地租改正でどのような問題が生じたかという課題を提起している。『十島村誌』ではその検討がなされているが（七四二ページ）、奄美ではどうであったか、課題が提示される。

（奄美郷土研究会会員）

南海日日新聞　平成7（1995）年12月28日

『十島村誌』を読む

島嶼と奄美史を理解するために

○●6

弓削　政己

貴重な問題提起書

「奄美の矛盾」も照射

これまで『十島村誌』を読みながら、島嶼（しょ）と奄美史理解の手がかりをいくつか検討してきた。いかに奄美と関係が深いかを改めて考えさせられた。最後に、私たちはトカラをどう認識してきたかということを検討したい。

トカラを見る眼

故宮山清先生が一九九三年（平成五年）に出した『黒潮の島　戦時中の十島記』（私家版）は、一九四三年（昭和十八年）四月から四六年三月まで十島村（じっとうそん。五二年二月十日から「としまむら」と呼称）の中之島国民学校長であった先生の三年間（戦時中）の生活、見聞、教育の体験記録である。ここには当時の人々や宮山先生のトカラに対する見方があらわれている。

①奄美の人々にとって「僻地」と意識されていたトカラ。②この「僻地」への赴任は、当時は評価されていなかった。③しかし、断わったら「僻地」の教育は成り立たない。④知人が十島について説明しようとするのを断わり、「自分で臨んで、自分の眼で確かめる」。⑤船は島の生命で、航路問題こそ「島の宿命であり僻地の原点」。⑥十島村が大島郡管内であっても、大島郡で一番高い山は宇検村の湧川岳（六九四メートル）とされる。実際は、中之島の御岳（九七九メートル）、諏訪之瀬島の御岳（七九九メートル）の方が高い。地理・地勢も無視された。⑦学制施行は一九三〇年（昭和五年）で、明治学制ができて六十年後。国が「見捨てて顧みなかった」ことに「義憤を感ずる」。

宮山先生がここに述べているのは、自己のトカラ愛識・認識を「先入観」でなく、自分の眼で確認しながら深めていったことである。だからこそ、その置かれた環境に対し「義憤」を感じているのである。当時の奄美が、トカラを「放置」している状況が見えてくる。

「独立経済」の矛盾

奄美でしばしば、藩や県の施策についてプロテストする行動がみられる。しかし、一方で自らの分析を怠るという側面があり、その問題点を私はこれまで幾度か指摘してきた。その克服として各事象を全体的構造の中に位置づけることを提起してきた。

たとえば「独立経済」の事例。奄美の行財政では、近代の大半を奄美の租税と国・県のわずかな補助金で運営してきた。これが奄美の「歴史的貧困」の大きな原因だという。それはそれとしてうなずける。一方、同時期、トカラも「大島独立経済」に含まれていた。その時期をトカラはどうみているのか。

「県は奄美を差別し、奄美は十島を差別した。税と兵隊は確実にとられたが、港も道路も未整備のままだった。電気も通信施設も零のまま放置された。学校は自分たちで建てた。近代化政策のおくれなんてもんじゃない。何もしてくれなかった」（七七九ページ）

この指摘も含めると、奄美の「独立経済」研究を進めるうえで、①奄美の貧困の基本矛盾は、明治国家と奄美の関係にある。それは、奄美の国税に対して補助割合が低いことに示される。②それを促進したのが「独立経済」という県と奄美の矛盾。③その中で奄美の支配層と島民の内部矛盾。④島民の運動のなかで県補助が増額したという島民の主体性の問題。⑤奄美の予算と十島への施策の視点が必要である。また、その相互の関連を明らかにする課題が生まれる。

以上、私の当面の関心から『十島村誌』を読んでみた。この書が提起する問題は、私が述べてきた以上にまだまだ多い。奄美・トカラ関係史でここでは触れなかったが、藩政期の飢饉（ききん）米、流人、復帰運動や復帰後の比較史、密貿易、金子丸、トカラや奄美相互の移住者と地域の対応など多くのテーマがある。そのような意味でも『十島村誌』は、奄美の自己認識の修正や島嶼研究前進のために必読の書であることは言を待たない。

（奄美郷土研究会会員）

＝おわり

黒糖解放と東雲新聞

群島リポート

大阪で明治二十年代前半に発行されていた東雲（しののめ）新聞は、明治前・中期の黒糖自由売買運動「勝手世騒動」など、本土商人たちに搾取されていた奄美の黒糖売買に関する記事の掲載で知られるが、このほど大阪で同新聞の復刻版をつぶさに検証してきた郷土史家・弓削政己氏（四六）によって、長崎控訴院での島民と鹿児島の商社の控訴審の判決文や、商社による上告への経緯を述べたものなど奄美の近代史研究の資料となる幾つかの貴重な記事が新たに確認された。これで黒糖解放運動の史実解明がさらに進むものと期待される。（中島敏光記者）

新資料、弓削氏が発見

控訴審勝訴の判決文も

弓削氏によると、東雲新聞は約三年十カ月の発行期間中に奄美関係の記事を十八回も掲載。関連する五種類の記事や広告もあり、当時のこの種の新聞として掲載頻度は極めて高い。

黒糖売買に関する係争事件は、商社からの前借りが二年後には倍以上の額になるなどの不当な取引状況下で、一致して負債返済を拒否（三方法運動）する島民たちに対し、商社側が次々と提訴していったもの。

今回確認された判決文は第四七四号（明治二十二年八月十日付）、第四七五号（同十一日付）に掲載。南嶋社が笠利方赤尾木の碇山碇和喜を訴えて鹿児島軽罪裁判所県大島支庁で敗訴したのを受けて控訴した長崎控訴院の判決。言い渡しは同年七月十六日。

この控訴審で商社は砂糖五千二百九十一斤九合、金額で百七十一円四十五銭八厘と利子など合わせて百九十七円九十一銭八厘を請求する。しかし、裁判所は島民の主張をほぼ認め、商社側の砂糖評価価格と利子の不当性を指摘。負債を半分、近くの砂糖二千三百六十五斤か、それを当時の島内の時価で換算した金額としての払い渡しを命じている。

島民の控訴審での勝訴だ。

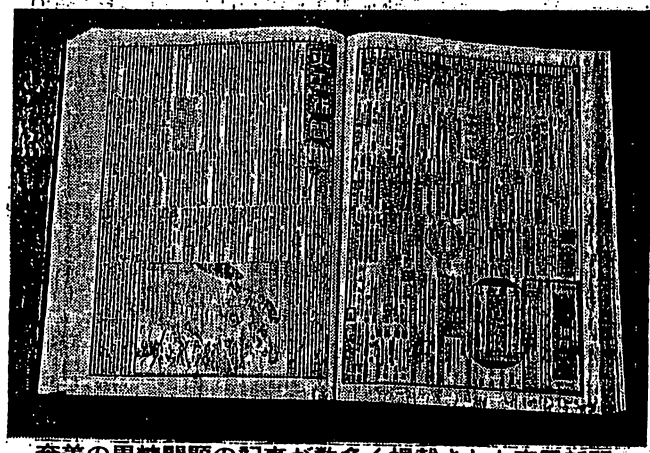
だが、この裁判では、台風など災害で消滅した砂糖の分の前借りは返済の必要無しとする「砂糖前売の未必条件」が認められていない。この点では南嶋興産商社が敗訴した鹿児島始審裁判所大島支庁における第一審判決より後退したことが分かる。

控訴審で敗訴した南嶋興産は窮地に立たされた。世間の批判も出てきたため関係者は協議して大審院に上告する方針を決め、県出身の大蔵省役人らに協力を要請。しかし、資金拠出がままならず、費用確保のため不動産の一部を売却したという記事も確認された。

このほか「本年の黒砂糖」「大島糖業の勝負」「沖縄の定期航路」などの記事も見つかった。

奄美に関する東雲新聞の記事はこれまで幾つか確認され、『名瀬市誌』でも利用。丸田南里氏を中心とした勝手世騒動やその後の三方法運動など黒糖解放運動の解明に生かされてきた。今回、弓削氏の綿密な調査で同新聞における奄美関係の記述が全体として把握できたことになる。

弓削政己氏の話　東雲新聞の記事でいわゆる奄美島民徒家衆事件の史実が訂正され、控訴院段階までの黒糖裁判の過程が把握でき、島民の動きも具体的に分かる。これらは当時の新聞資料収集が重要なことを改めて示している。



奄美の黒糖問題の記事が数多く掲載された東雲新聞（復刻版）

記者の目

丸田南里シンポ

勝手世運動の実像に迫る

興味深い余計糖と余沢金

明治維新後も収奪され続けた奄美の黒糖。大きな犠牲を払いながらこの自由売買の権利を勝ち取った勝手世（かってゆ）運動のリーダー・丸田南里を語るシンポジウムが十日、名瀬市であった。運動史の上での分析が先行し、経済史の側面からの検証が課題と言われるこの運動。五氏が行った講演・報告の個々を終了後に時間をかけて組み合わせてみると今後につながる研究成果や問題提起であったことが理解でき、頭の中でジワジワとその意義が深まってくる。

最も興味を引かれたのは弓削政己氏による「余計糖」売り上げの分配の数値的解明と「余沢金」の問題。

島民の税金相当分＝貢糖＝を除いた黒糖の残り、つまり余計糖の商社との間で設定された価格で島民との分配はどうだったか。また、その価格を上回る大阪市場の価格との差額＝余沢金＝の扱いはどうだったのか。

弓削氏によると、明治五年から実施されていた分配方式では黒糖価格を一斤当たり一貫二百五十文で固定。うち島民の取り分は七百五十文、商社が五百文とされた。大阪での市場価格が高かった場合は、差額、つまり余沢金は「折半」という契約だった。しかし、商社側はこれを反故（ほご）にし続ける。これが島民の不満のタネとなり、大阪市場の価格は「二貫文だ」として島民は余沢金返還要求を繰り返す。結果は、五年の分の余沢金は返すが島民取り分は百文下げるという条件で明治七年に島役人と県が勝手に決める。この値下げがまた新たな不満を生む。

九年に新たに結んだ約定では設定価格を一斤当たり一貫五百文に引き上げ、分配はそれまで通り「四分通り」（商社分）とし、島民分は九百文となる。弓削氏はこの約定からそれ以前の分配額を逆算したのだった。「この分配額が明らかになることで勝手世運動全体の理解が進む」と言う。

貢糖について考えると、黒糖現物納入による県の収奪もわかってくる。

当時、この余沢金返還要求が運動の一つの基軸だったと弓削氏は指摘、七年には商社が余沢金を島民に返さざるを得ないほどに運動は成果を見せたことを明らかにした。これは丸田南里の帰島以前の、島民の主体的な運動が一定成果を上げていたことを示す。南里は運動がこうした盛り上がりを見せる中、海外から帰ってきたのだった。

丸田南里と勝手世運動を論じたシンポジウム（10日、奄美博物館で）

南里の帰島あたりから島民要求は商社解体、税金の金納、黒糖自由売買などへと昇華していく。だが、それ以前、何がどのように島民に不満だったのか。バイブルともいえる『名瀬市誌』でも具体的に数値を伴った姿としては描かれていない。今回のシンポでこの一端が明示されたのは意義深い。

南里の帰国は一八七五年（明治八年）とされる。シンポで杉山伸也氏はこのころ世界の砂糖生産の主力は、カリブ諸国などのサトウキビからヨーロッパなどのテンサイ糖に移る一方で、国内自給率も三〇％と頑張っていたと述べ、グラバーと奄美の関係も述べた。皆村武一氏は維新後の大島商社設立に関して、鹿児島県は旧藩以来の豪商の保護・仲介で経済的利益を保持しようとしたと述べ、新たな商人の名を示した。真栄平房昭氏は砂糖を手掛かりに幕藩国家における中央市場と周辺地域を結ぶ生産・流通関係に目を向け、北国で黒糖の資料が存ることを挙げて「砂糖の道」の検討を提案した。これらを絡み合わせると課題は一層広がる。

欲を言えば報告者同士の質疑にもっと時間がほしかった。しかし、視野を国内他地域、世界に広げ、年代も広げて研究者の比較、検証が進むと、勝手世運動と南里の実像がさらに見えて来る―そんな期待を抱かせたシンポジウムだった。

（中島　敏光記者）

この企画は毎週月曜日に掲載します

平成 13・14・15 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書
「琉球と日本本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的位置づけをめぐる総合的研究」

平成 16（2004）年 3 月 23 日発行
発行者　琉球大学法文学部
研究代表者　高 良 倉 吉
〒903-0213　沖縄県西原町千原 1 番地　TEL 098-895-8284（代）

印刷　株式会社　国 際 印 刷
〒901-0147　沖縄県那覇市宮城 1-13-9　TEL 098-857-3385（代）

裏表紙の写真は、十島村の村花「マルバサツキ」。